九州産業大学国際文化学部紀要　第67号　1－36（2017）

アイルランド演劇を掘り起こす（16）
――ジョージ・シールズ『新青年』

河　野　賢　司

はじめに

『ジョージ・シールズ戯曲選集』（*Selected Plays of George Shiels*, 2008）に収録された戯曲６篇のうち、すでに５編を筆者は本誌で以下のように紹介してきた。

『ティム教授』(*Professor Tim*)	本誌45号、2010年３月
『険しい道』(*The Rugged Path*)	本誌46号、2010年９月
『山頂』(*The Summit*)	本誌47号、2010年12月
『過ぎ逝く日』(*The Passing Day*)	本誌49号、2011年９月
『取り返す人たち』(*The Retrievers*)	本誌52号、2012年９月

随分と間隔があいてしまったが、本稿では残っていた６編目の『新青年』（*The New Gossoon*）を取り上げる。初演は1930年４月９日、ダブリンのアビー劇場。演出（およびヘンリー役での出演）をアーサー・シールズ（Arthur Shields, 1896-1970）が担当した。シールズ作品のなかでも人気作[(1)]の一つで、アビー劇団はこの作品を３度（1932、1934、1937年）アメリカのブロードウェイで再演している。なお、原著表題の一部‘gossoon’（ガスーン）は17世紀後半（初出は1684年）にフランス語‘garçon’（ギャルソン）から転訛したアイルランド語であり、邦題の『新青年』は同名の中国の文芸誌（1916-26）や日本の娯楽雑誌（1920-50）を意識して付けた拙訳である。

第１章『新青年』の梗概

第１幕　時は初演の現在（1930年）。ケアリー家が暮らす農家の台所。６月の赫赫たる夕陽が裏手の窓に映えている。30歳前後でがさつな下女マグ・キョウ（Mag Kehoe）が干し草畑から戻り、日除け帽を放り投げ、汗をタオルで拭いながら、炎

(1)　選集の序文(p.xvii)によれば、1930年の初演から1951年までの累積上演回数は188回を数える。

天下の労働で「カニのように真っ赤になって皮がタマネギみたいにむけちゃうわ」と愚痴をこぼす。

続いて、ラビット・ハミル（Rabit Hamil）が来訪。帽子をマス釣りの毛針で飾り、ウサギの罠２丁と網を肩から下げている姿は、本職の密猟者然としている。ケアリー家の寡婦（エレン）の所在を訊かれたマグは、私の知ったことじゃない、と不機嫌に応じる。夕方６時近くまで畑で働かされたうえに、乳搾りや仔牛・豚の餌やり、明朝のポテトの煮込みなどの雑用が待ち受けており、アメリカの黒人奴隷を解放した人（リンカーン）がアイルランド大統領だったらいいのに、とまくしたてる。その怒濤のお喋りを動力源に利用して圧縮空気で作業ができそうだな、とラビットは呆れる。ラビットの矢継ぎ早な問いかけに、昨夜、ラビットの娘サリー（Sally Hamil）に誘われたマグはハミル家を訪ね、台所でラジオ（wireless-box）放送のお喋りを聞いたこと、その折にケアリー家の一人息子ルーク（Luke Cary）は居合わせず、中古バイクを手に入れた彼は毎晩愛車を乗り回して、ここ数週間は訪ねていないことや、ルークの差し金でサリーからなにか秘密を聞き出そうとするスパイ活動など金輪際していない旨、マグは答える。俺もサリーもケアリー家から侮辱を受けたとラビットは息巻き、俺への侮辱は、30年以上出入りしてきた山に突如、「無断侵入者は告訴、犬は射殺する」と書かれた標札が何本も立てられたことであり、俺の訓練された飼犬はケアリー家が放牧している羊を襲うことはない、と主張する。標札設置はケアリー家の下男ネッド・シェイ（Ned Shay）の仕業かも、と弁護するマグに、後家さんのまわりには、たいてい、いろいろ口出しする男がいるもんだ、と二人の関係をラビットは勘ぐる。マグは驚きながらも、たしかに御上さんは「ねえ、ネッド」（Ned, dear）と親しく呼びかけるし、食事を共にする時にはアヒルの青緑色の卵や大きめのポテトをネッドに差し出している、と納得する。ネッドが標札の件で入れ知恵しているなら俺が始末してやる、とラビットが逆上すると、そうなればケアリー家は（働き者ネッドを失って）ガタガタになるに違いなく、ぜひともその様子を見たい、自分と同じ下僕の身分なのに、ネッドは「他人をこき使う性分の持ち主」（a born slave driver）で、彼自身いつも汗だくで働いている、と応じる。水を一杯所望するラビットに、マグは濃いジャーズィー乳の入った大きな水差しを渡し、猫の舌が届かない１インチ分だけ余して牛乳を飲み干したラビットは、マグに礼を言う。機会があれば卵酒（egg-nog）も御馳走するわ、と勧めるマグに、昨夜俺の家を訪ねたことは絶対に口外するな、と彼は忠告する。娘サリーと仲良くなっただけの理由で前の下女は解雇されたからである。下女が古新聞みたいにポイ捨てされる時代は終わったのだから、御上さんがどう思おうと構わない、とマグは反発するが、近隣に別の働き口が見つかるにしても用心するに越

したことはないし、もし解雇を言い渡されたら、ルークも俺の家に来ていたことをほのめかすように、ラビットは入れ知恵する。一足先に台所に戻ってお茶を準備するように命じたルークは6時きっかりにここに戻って、製粉所の別の女の子とデートしにバイクで出かけるはず、とマグは教えるが、待ちきれないラビットは、ルークのいる干し草畑へ向かう。ケアリー家はこれから大戦争に見舞われるわ、とマグは呟く。

40歳だが瑞々しい艶のある女主人エレン・ケアリー（Ellen Cary）が戻る。エレンはマグに、あと3日で雇用契約期限の1年を迎えるので、別の勤め先に変わりたいでしょうね、と水を向け、御上さんが望むならやむをえません、とマグが受け入れるや、最後の給金を取りに行きかける。靴を修繕に出しており退去は明朝まで待ってほしいとマグは申し入れ、雇用期間が延長されない理由を聞きたがる。マグの人柄も仕事ぶりも落ち度は見当たらないけれども、ある嫌いな人たちと仲良くしているのが解雇の理由だと告げるエレンに、早速、息子さんのルークもハミル家を訪ねているのに…とマグは口走り、それを聞き咎めたエレンに、それ以上の詳細は語らず、口をつぐむ。マグを見くびっていた自分にエレンは驚くが、ともかく円満にお別れしましょう、と給金を取りに行く。そんな金は水差しに突っ込んでぐちゃぐちゃにすればいい、とマグは憤る。

ルークが急いで登場。落ち着きがなさげな若者で、ネル地のズボンに柔らかい襟の縞模様のシャツを着ている。早くお茶を出せとルークは何度もマグに催促し、即時解雇された経緯をマグが話してもまったく平然としている。

行き違いになったラビットが再び登場し、「無断侵入者は告訴、犬は射殺する」の標札は自分にも適用されるのか、とルークに尋ねる。標札は万人に適用され、雑種犬の群れに羊を襲われるのは許せない、ラビットの飼犬が山から羊を追い払う現場をネッド・シェイが目撃した、とルークは答える。反論するラビットをマグがけしかけて応援するので、ルークは彼女を出て行かせる。解雇され自由独立の身になった以上、もう誰の指図も受けないし、後釜に座るお女中さんは（ケアリー家を避けて）マケイン大尉（Captain McKane）の家だけを訪ね、ケアリー家の威厳を落とすことがないように願うわ、と辛辣な捨て台詞を吐いて退場。ラビットは行方不明の羊の頭数を問い質し、赤いセッター犬2頭が羊5頭を追い回すのをネッドが目撃した、とルークは具体的に答える。羊の行方の調査を任せてほしいと切り出すラビットの依頼をルークは拒絶し、標札も撤去しないと主張する。亡くなったルークの父親から、全山での狩猟許可を得ていた事実をラビットが持ち出すと、数日後に土地の権利を取得する自分は、山の狩猟権をマケイン大尉に年10ポンドで貸し与えるつもりで、当然ながら密猟者の出入りを大尉は望まない、と説明する。標札の撤去を要求するラビットとそれ

を拒否するルークの対立は深まる。おりしも、ネッドが窓辺を通りかかり、ルークは立ち寄るように声をかける。

ネッドが登場。40歳になったばかりの、聡明な作男の好例で、手に干し草用の熊手を持っている。ラビットが開口一番に、自分の飼犬が羊５頭を追い回したことを詫びると、ネッドには初耳のようで、自分は目撃していないと答える（直前に、返事をするなと、ルークがネッドに命じるが、間に合わなかった）。事情を察したラビットは、すぐに立ち去る。実際に目撃していない以上、他に返答の仕様がなく、イタチのような作り笑いを浮かべるラビットとは関わり合いになりたくない、とネッドは釈明し、ラビットと喧嘩する余裕がないなら、設置した標札を撤去する方がよい、とルークを諭す。ルークの母親エレンとマグはいま牛小屋にいて、マグがどういうわけだか解雇されたことに触れ、話し好きだが仕事もできるマグが辞めるのは惜しい、とネッドは同情する。ルークは１日15時間の農作業時間を削減して、午後６時には１日の仕事を終了する新しいルールを導入したいと考えているが、長年にわたって身についた勤労習慣はすぐには改めにくく、土曜の夜に支給される給金も御上さんから貰っている、とネッドは弁明し、代替わりが実現した暁には、命じられた時刻に作業を開始・終了する、と答える。母から別の用事を言いつけられないうちに早く帰宅しろとルークが促すと、エレンが登場。早速、豚小屋で藁が不足し、床板が剥がれているので修繕をネッドに依頼する。ルークもネッドに標札の撤去を頼み、羊を襲ったのはラビットの飼犬ではなかった、と白状する。ネッド退場。

エレンは、夕食を急いで掻き込んでいる息子を叱り、まだ干し草の作業が残っており、夕陽が燦然と照りつける今夜のうちに仕上げるように促すが、これからは世間並みに午後６時に仕事を終えるルールを作り、深夜まで働いて寝床にもぐり込むようなことはしない、とルークは宣言し、足を踏み鳴らして退場。エレンは中古バイクに向かって悪態をつき、金槌をつかむものの、叩くべき「ゼンマイ」（mainspring）の在処が分からないから、木っ端微塵に壊せない、と嘆く。そこへラビットがまた戻る。機械修理工の真似事をやっているのか、それとも（バイクを壊して）機械修理工に仕事をやるつもりなのか、と彼に問われて、手出しはしないけれども、バイクを見るのもガタガタ音を聞くのもバイクの匂いも嫌い、とエレンは答える。しかもバイクは危ないからな、と応じるラビットを遮り、バイクの元の持ち主はあの世へ旅立ってしまったほど危ない乗り物だからこそ、グレイハウンドの仔犬１匹を売って儲けたわずか６ポンドの所持金で買えたのだと、エリーは説明する。しかし、ラビットは、そのバイクは実は装備品一式（皮ジャン、ヘルメット、ゴーグル）を含めて20ポンドの値段であり、ドッグ・レースでルークが儲けた６ポンド（雄犬オウウェン・ロウ・オニールの配当金８

ポンド、雌犬レッド・メイヴで２ポンドの損）に、山の羊５頭を売り払って得た10ポンド、残り（４ポンド）はさる人（a certain party）から借金して用立てて、いまバイクがそこに鎮座しているが、専門家の話だと、そのバイクは実は30シリング（＝１ポンド半）の値打もない代物だと、と詳しく解説する。しかも、ラビットは、罠を仕掛けていた明け方時に、肉屋の少年が５頭の羊（その臀部にルークが識別用の赤ペンキを塗っていた）を連れ去る現場も目撃した、と言う。羊が失踪した真相を悟ったエレンは、亡き夫がラビットに与えた狩猟権は引き続き維持されることを請け合う。ラビットは彼女に感謝する一方、ルークが成人に達して代替わりすれば「新しい王が新しい掟を作る」のではないかと案じる。それに対し、たしかに来週の火曜日にルークは21歳の成年を迎えるけれども、農地などの所有権をすぐに受け継ぐ訳ではなく、これから私も左団扇で暮らしてしかるべきだと思う（I think I'll have my day here. I think I deserve it.）と、エレンは語る。ラビットはそれに同意するものの、夜毎バイクで街を徘徊するルークが、自損事故や傷害致死を引き起こさないまでも、素足を丸出しにして世間に恥をさらすような図々しい顔をした「街のふしだら娘」（town hussy）をバイクの後部シート（tail-boord［＝board］at the back）に乗せ、そいつはルークの腰に両腕でしがみつき、時速50マイル（80キロ）で二人して帰ってくるだろう、と脅す。息子の日頃の振る舞いについて何も聞かされずにいたエレンが、息子をどうすればよいかと尋ねると、頭の切れる善良な田舎娘をあてがってやれば、こんな回転木馬のような代物（＝バイク）は忘れてしまうだろうが、＜田舎娘と結婚しない＞と言い張るルークを甘やかせば、ハイヒールや絹の靴下、セーターに農作物の儲けは残らず消えてしまうだろう、とラビットは忠告する。さらに彼は、すでにひどい目に会った農夫の子伜どもを５人知っており、５人ともこの道具（implement）［＝バイク］を持っていて、３人はたちどころに事故を起こして首の骨を折り、残る２人は街のふしだら娘と土壇場になって結婚する羽目になったが、そんな娘どもは雌鶏に餌もやれない始末で、農家には役立たずだ、とこきおろす。そして自分の娘サリーこそがルークの嫁に相応しいと、ついに本題を切り出す。12年前のラビットの妻の葬儀以来、ハミルの家を訪ねていないエレンに、サリーのお陰で我が家がすっかり「化粧箱」（bandbox）のように様変わりしていること――台所にはラジオ、隅にはミシン、青色の漆喰で塗られ、壁紙を張った壁、窓にはブラインド、満開の鉢植えゼラニウム――や、サリー自身も実業学校の冬期講習で花嫁修業を積み、ウサギ１羽で９通りものスープ・レシピーを覚え、ラビットがいま身につけている靴下やシャツは彼女の手作りで、チョッキに縁飾り、帽子に毛鉤を縫い付けるほどの裁縫上手で、日々刻々、我が家に「新鮮な驚き、新鮮な恵み」（a new wonder, a new blessing）をもたら

す存在だと、娘自慢を繰り広げる。

そこへ、下女マグが登場。豚が床板を食べており、エレンに見に来てほしい旨のネッドの伝言をもたらす。エレン退場。マグは早速、ルークが例の標札の撤去をネッドに命じた情報をラビットに知らせる。羊を売却したことをごまかすでっち上げだった「ひとくさり」（a chapter）はすでに母親エレンに暴露したので、いまさら標札を撤去しても「後の祭り」（missed the last bus）であり、もうひとつ別の暴露話も、まもなくやってくる娘サリーがエレンに話して聞かせるはずで、もしサリーが「お調子者」（a clown）ルークに結婚を承知させられなければ、金（慰謝料）を払わせるだけだ、なにしろ「コインは婚姻に匹敵する」（Hard money's as good as matrimony.）と、ラビットは駄洒落をとばす。明朝、ケアリー家を出て行くことをマグが伝えると、ラビットは、俺の身の回りの世話をするために我が家へ来ないか、と声をかける。妻に先立たれてからまともな食事にありつけず、50歳を前にして年金生活者のように老けこみ、鏡に向かって化粧するしか能がない娘は、俺に料理も作らずにシカトする始末だ、とラビットは嘆く。思ってもみなかった、ラビットからの無骨なプロポーズにマグは有頂天になり、誠心誠意を尽くして、立派な妻になる、と誓う。もしサリーがこの「甘やかされた馬鹿野郎」（pet madman）［＝ルーク］と結婚できない場合でも、手に入れた慰謝料で、スコットランドに嫁いだ姉の元へ行くから、いずれにしても娘と入れ違いに我が家に迎え、所帯を持つ計画だと、ラビットはマグに打ち明け、御破算になるといけないから誰にも口外するなと、命じる。結婚を諦めていたマグはますます興奮し、かなりの額の郵便貯金があるので、花嫁衣装は青いフリルの赤いドレスにしよう、と夢を膨らませる。

エレンが戻り、ネッドに斧を持って行くようマグに命じ、マグは従う。これからミルク加工場に出かけると告げるエレンに、１日分のミルクを分けてくれないかとラビットは頼み、解雇したマグの代わりの下女が見つかるまでの間、娘サリーを使って家事や乳搾りをさせてほしい、と申し出る。

エレンが答える前に、そのサリーが登場。20歳の娘で、原色のセーターとスカート、髪は流行りのパーマで波打ち、手には水差しを持ち、タバコを吹かしている。ラビットはタバコを口から離せと叱り、ミルクを分けて貰えることやマグの代わりに臨時で家事手伝いをすることを娘に説明するが、彼女はろくに返事もせずに、初めて見るルークのバイクの荷台に尻を乗せる。街のふしだら娘のような真似はするな、とラビットは繰り返し命じるが、これに乗って時速1,000マイル（1,609キロ）ですっ飛ばしたい、この前観た映画では彼氏が彼女を飛行機に乗せてさらって行ったわ、とまったく意に介さない。それどころかクラクションにも手を伸ばすので、家じゅうに響き

わたる大音響をを恐れて、＜触るな＞とラビットは怒鳴る。

ルークが自室から戻る。オーバーオールに皮ジャン、ヘルメット、ベルトには長手袋をさし込み、腕時計をはめて、口にタバコをくわえている。誰かが愛車に触れたことを聞きつけてルークは腹を立て、二度と手を触れるな、とサリーに言い渡して、再び退場。息子の不機嫌な態度をエレンは詫び、サリーから水差しを受け取って、ミルクを注ぎに退場。街のふしだら娘のようにバイクに座るのではなく、エンジンを蹴飛ばす姿をエレンは見たがっていたはずだ、とラビットが娘を諫めても、エレンにへつらうつもりなどなく、手に入れるものは闘って勝ち取る、とサリーは主張し、ルークと差しで話がしたいから、外へ出るようにラビットに言う。最初に（結婚の）話をすべき相手は母親だ、とラビットは反対するが、ルークの説得に自信を見せるサリーの言葉に従って、戸外で待機してエレンを引きとめておくことを了承する。ラビットとエレンに駆けつけてほしい場合には、合図としてバイクのクラクションを鳴らすことを伝え、今から鳴らすクラクションはルークを呼び出すための例外だと断って、クラクションを鳴らす。

ラビットの退場と入れ違いに、ルークが自室から登場。父親が頼んでいたミルクを貰いに来たとサリーは伝えるが、それは単なる口実でラビットが何か罠を仕掛けているのだろうが自分は引っかからない、とルークは答える。父親はこの件と関わりがなく、また母親エレンに告げ口をする気もなく、二人だけの問題だから二人で決着をつけるべきだとサリーは迫り、30分後に橋で会おうというルークの提案を拒絶して、この場での話し合いを断固として主張する。そしていきなり核心に入り（cut out the frills）、成人を迎えて農地を相続したら結婚するとあなたは約束したのだから、誕生日の翌日（水曜日）にその約束を果たすのか、それとも来月７月なのか、あるいは８月、９月になるのか、その日取りを特定するように激しく詰め寄る。ラビット・ハミルの娘と夜通し立ち話をする気はない、と逆ギレするルークにサリーは平手打ちを食わせ、逃がすまいとバイクにしがみついて、私の話を最後まで聞いてからこのジャガイモ掘り機（＝バイク）に乗ってどこへなりとも失せればいい、と迫る。バイクで轢き殺してやるぞ、とルークが怒鳴ると、「とうとう本音を漏らしたわね」（you’ve spilled the beans）と、サリーは合図のクラクションを鳴らす。

ラビット、続いてエレンが登場。自室に逃げようとするルークのベルトをサリーはつかんで、「素直に報いを受け」（face the music）ないなら目ン玉をくりぬいてやるわよ、と凄む。彼女は、ルークが結婚の約束をしたのに今になって有耶無耶な態度をとっている、とエレンに直ちに訴え、ルークはそれを言下に否定する。サリーはルークが彼女に悪夢のように付きまとっていた事実をいくつも並べたてる。たとえば、水

汲みに井戸に行くと、［畑を耕しているはずとエレンが思っていた］ルークが井戸端に座って呻き声を上げていたし、牝牛の乳搾りに行けば灌木の下でハリネズミのように背中を丸めて［何度も、死んだように］へたりこんでいたし、仔牛に飲み水を持って行けばさながら仔牛のように待ち受けていたし、夜中にも練り粉の塊［あるいは鳥のフン］のように暖炉棚にくっついて［椅子に］座っていた、と語る。（彼女のこうした証言は、ラビットによって［　］の相槌の言葉で裏書きされる。）エレンは息子がハミル家に出入りしていたことを知って驚く。最近はそれほど迷惑をかけていない、とルークはその事実を認める。「あの長く退屈な煉獄のような苦しみを無駄にはしないわ。1,000ポンド貰ったって、もう二度と、うすのろを飼い馴らすのはごめんよ」と、サリーはルークに愛想を尽かす。

エレンは再度、ルークがサリーと結婚すると本当に約束をしたかどうか、サリー本人に念を押す。少なくとも1,000回、昼夜を問わず毎時、自宅から１マイル以内のあらゆる場所で、決まって同じ哀願口調の「サリー、僕と結婚してくれますか？」を聞かされ続けたものだから、そのガンガン鳴る声を耳から追い払うために承諾してしまったのだと、サリーは経緯を説明する。ルークから婚約指輪を貰ったか、という問いには、ルークが割り込んで否定する。本人は女たらしのドン・ホアン（Don Juan）気取りかもしれないが、実際には、自分に気があると勘違いして娘を追い回す、教区一の「大間抜け」（the biggest gafoot）で、大西洋横断飛行士のような格好をして、インチキ仲買人から買ったバイクに乗って田舎道を行ったり来たりしている姿を見ては、小学生の女の子たちもクスクス笑いし、牝牛だって動きを止めて彼の姿を見送っていると、サリーはこきおろす。次にエレンは、ルークにも同様の質問をし、彼は否定する。さらに、ルークは手紙を彼女宛てに書いたかとエレンが尋ねると、郵送でなく手渡しで貰った手紙を何百通も保管してあり――ルークはサリーからの手紙をすでに焼き捨てている――、長文で馬鹿馬鹿しい内容だから目を通していないが、性懲りもなく同じような手紙も今度は製粉所のビディ・ヘンリー（Biddy Henly）に書き送っている、とサリーは暴露する。二度とその話はするな、お前もラビットも蹴り飛ばすぞ、とルークは大声を上げ、ラビットは、やれるものならやってみろ、と喧嘩腰になるが、エレンに宥められて冷静になり、娘の主張に誤りはないから、ひとまず家へ帰ろう、と促す。エレンは判断材料を得るために、ルークから貰った手紙を１通読ませてほしいとサリーに依頼する。明日持参する袋一杯の手紙の中から、籤を引くようにどれでも１通取り出して、もし婚約についての言及がなければ全部を焼却するとまで自信を示すサリーに、来訪予定の伯父ピーター（Uncle Peter）にこの件をすっかり知らせたいので、できれば今夜中に手紙を読ませてほしい、とエレンは要

請する。ルークはハミル一家の悪態を吐いて自室に駆けこむ。

息子とサリーが「挨拶を交わす」（bid the time of day）以上の間柄で、息子がサリーの家を訪ねていたことも知らなかったと驚きを隠さないエレンに、私が初恋の女性だったのでルークはすっかり夢中になってしまい、牧羊犬さながら、食事に戻る以外の時間はひねもす私の仕事ぶりを見つめているような「全く困った人」（a fair plague）だったけれども、今では製粉所のビディ・ヘンリーを追い回している始末だから、「ただではすまさない」（I'm not going to let him off with it.）と訴える。慰謝料に100ポンド貰ってスコットランドに行くべきだ、とラビットは切り出し、ちっとも傷ついていないと言うサリーの発言は訴訟で不利になると口止めし、毎晩泣きながら部屋を歩き回る娘の声が聞こえると、エレンに作り話をするが、そんな覚えはないから夢遊病に違いない、とサリーは即座に否定する。さらに、男性が20年も密かに女性を思い続けた末に密かに自分から身を引いても、女性は誇り高くてそれを口外できないような、昔の「恋のなりゆき」（love business）と違い、現代の若い女性は頭脳を優先して使い、感情は後回しにする、と主張する。都会はそうでもその変化は田舎まで及んでいないとエレンは反論するが、もうじき、より良い変化が僻地にも訪れるはずで、事実、私は３真空管式受信機（FM、AM、短波の３波ラジオか）を手作りしたので皿拭きをしながらロンドンやパリの電波を受信できることを紹介し、現代では男性は羊を買うみたいに女性を金で買うことはなく、「用心しないと痛い目に会う」（watch his step or pay the piper）ので、以前よりも自惚れ屋の男性が減っている、と主張する。ルークから好かれていないなら、ルークとの結婚は望まないのではないの、とエレンに訊かれたサリーは、それならそもそも私にプロポーズをするべきではなかったし、この芝刈り機（＝バイク）を手に入れるまでは私に惚れていたし、私の方も彼が「ろくでなし」(rotter)になるまでは好きだった、去年１年間、ルークが道を踏み外さないようにしてあげたことにお礼を言ってもらってもよいくらいよ、と憤懣をぶつける。古風な考え方のエレンは、サリーのこうした強い自己主張に違和感を表明し、ラビットもまた、娘はどういう人種に属しているのか、と自問することも多いけれども、良い子には違いない、と請け合う。ルークが「正々堂々と振る舞って」(played the game) いたなら、百万ポンド貰っても彼を諦めたりしないけれども、「ろくでなし」だから「活を入れてやるわ」（I'll make him sit up)、とサリーは腹をくくる。エレンは、ミルクのお代は無料であり、今後も必要ならいつでも貰いに来てほしいと伝え、サリーは礼を言って、退場。

山奥で育った20歳前の自分の娘が現代風の考え方を見せたことにラビットも驚くが、エレンは、サリーもルークも「新しい兆候」（a new symptom）なのよ、と

受け入れる。娘は新品の釘のように真っ直ぐな性格で、ルークに言いつけを守らせ（make him toe the line）、従わなければぶんなぐるだろう、と噂話をしていると、当のサリーが舞い戻る。

ビディ・ヘンリーに今晩会いに行けないように、このジャガイモ掘り機（＝バイク）を分解するのを忘れていたわ、とサリーは言って、スパナを器用に使って点火プラグを外し、エレンに渡す。エレンはプラグをポケットにしまう。機械に弱いルークは不具合の原因を突き止めるのに１週間くらいかかるだろうし、今後も彼の計画を邪魔したい時はプラグを外せばいいし、バイクを最終的に破壊したいなら庭に運び出してガソリンタンクにマッチで火をつけて放置し、カリカリになるまで炎上させればいい、とサリーは言って、ミルク入りの水差しを持って退場。大きなことを言っても、やはり相手の娘を妬いているのね、とエレンが洩らすと、削りも刈り込みもできないのが「焼き餅」（jealousy）［という感情や言葉］っていうやつで、サリーたち新世代にも恋の悩みはあるってわけだ、とラビットは感に堪えない。

ルークが再び顔を見せ、（婚約不履行を）裁判沙汰にしたいならするがいい、と居直って、ラビットを追い払おうとする。エレンは、この家の当主は自分である以上、これまで通り山に出入りしていいし、好きな時に我が家を訪ねて構わない、とラビットを安心させ、ピーター伯父とも会ってほしい、と声をかける。ラビットは、彼とは旧友だから娘のサリーも連れて必ず出直す、と請け合い、立ち去る。

ラビットがいなくなるや、「あのならず者たち」（them vermin）と、とんだ羽目になったものだわね、とエレンはおかんむりだが、ハミル一家など露ほども気にしちゃいない（Not a spittle）と、ルークは意に介さない。連中の罠にはまってしまった以上、もう易々と逃げられないわよ、とエレンは警告するが、ラジオを聴きに数回立ち寄っただけで、年中入りびたっていたとか、数百通も手紙を書いたというのは嘘っぱちで、もしもそんな手紙を持ってきたらそれは捏造だ、とまでルークは強弁する。サリーから貰った手紙は焼き払ったし、サリーもルークからの手紙を焼却すると約束したという、先ほど聞いた話はどういうことなの、とエレンが問い詰めると、数枚送ったハガキを他人に見させたくなかっただけだ、と弁明し、サリーの話は真実でなく、自分の説明にまったく嘘はない、と断言する。するとエレンは、バイクの購入費用に話題を移し、ルークが言うようにバイクが６ポンドだったのなら、なぜ私の５頭の羊を売ったのか、と核心に迫る。火曜日になれば農地やその他一切合財（stock and all）を相続するのだから、羊の数頭ぐらい売っても構わないじゃないか、とルークは、売却の事実を暗に認めて居直るが、相続は私が死んだ後にすることも私の一存で可能なのよ、とエレンはルークをたしなめる。それなら、ずっとひた隠しにしてい

る父親の遺言状を、火曜日にはこの目で確かめる、とルークは反論する。これに対し、５頭の羊を山に戻すか、売って得た金を自分に渡すかしないなら、今夜にもマケイン大尉に会って、お前を牢屋に入れて貰うようにする、とエレンは強い姿勢に出る。しかし、そんな脅しは聞き飽きたよ、とルークは笑い飛ばす。するとエレンは、サリーを見習って（I'll take a leaf out of Sally Hamil's book）、お前のような「ごろつき」（rascals）――サリーは「ろくでなし」（rotter）とお前を呼んでいたけれども、自分はアイルランドの古い言葉を使うと言って――から身を守ることにする、と断言する。古い信念が爆発したように奇妙な思いが押し寄せてきた、とエレンは切り出し、自分は不機嫌な息子がつけ上がっても、できるだけ大目に見るような、時代遅れの親馬鹿だということが分かった、お前をショールでおんぶして、男のように犂を振るって畑仕事に精を出し、共働きできる善良な男と再婚しようなどとは夢にも思わずにこれまで頑張ってきたけれど、怠け者でわがままで強情で、ろくすっぽ知恵もないごろつきにお前を育て上げてしまった、と愚痴をこぼす。ルークは腕時計に目をやって、また今度、お説教は聞かせてもらうことにするよ、と、早く出かけたがる。エレンは、父方のピーター伯父さんが今夜もうじき訪ねてくるから自宅で待つように促すが、ルークは応じない。帰宅予定時刻も定かでなく、玄関の鍵を窓の敷居に置いておくかおかないかで押し問答の末、僕はごろつきで、お祈りをして夜７時に寝ないと忘れずに伯父さんに伝えればいい、今は新時代（New Time）なんだから、と言って、ルークはバイクを押して出て行く。どっちみち、遠くへ行けないわね、サリーのお陰で、とエレンは呟いて、ポケットから取り出したプラグを食器棚にしまう。幕。

第２幕　第１幕同様の設定。エレンがお茶の準備をしていると、マグが桶を持って登場。水差しに入れたクリームが減っている理由をエレンが尋ねると、畑帰りのルークが飲んだとマグは嘘をつく。桶に湯を入れて、マグ退場。入れ代りにネッドが登場。エレンはピーター伯父が来訪予定であり、ルークの件で伯父とネッドに相談に乗ってほしい、と話す。サリーがバイクからバネ（spring）を外したためバイクのエンジンがかけられず、道路を駆け回っている事情をエレンが説明すると、ただでさえルークは機嫌が悪いのにいっそう彼を怒らせるだけだ、とネッドは心配する。しかし、ルークに遠出をさせないための手段であり、ピーター伯父に引き合わせて善後策を講じるのだ、とエレンは答える。（ルークに指示されたとおり夕方６時で仕事を終えて）帰宅する旨をルークに伝えた手前、いったん帰宅してから出直しますと、ネッドが言うと、庭仕事がまだたくさん残っていて、庭はこの20年で一番汚く、手入れが行き届いていない（ragged）から帰宅にはまだ早いわ、とエレンは注意する。６時

に仕事終了を指示するルークと夜通しの仕事を望むエレンとの「板挟み」（between two fires）で、どうすりゃいいか分からない、と困惑するネッドに、給金を支払っているのは自分であり、ルークが「手綱を握り」（take the reins）仕事を仕切るようになるまでは、当分の間私がこの家の主であると、エレンは言明する。ネッドはエレンの言葉に納得して、早速庭の整地（square up）に向かおうとするが、残業現場をルークに見られることを心配する。ルークがなにか文句を言ったら私の所に行くように言いなさい、とエレンは強く命じ、ネッドも、その場合にはルークを追い払ってやります（send him to hell)、と答える。御上さんの息子とはいえ、「若造」（cub）に生意気な口を叩かれたら黙っちゃいないと、ネッドは鬱積した不満を初めて表明する。エレンはそれに驚き、誰にせよ生意気な言葉を我慢する必要はないし、自分と同じくらいルークを案じる気持ちをネッドが抱いていることに気づく。「男は仕事が一番大事」（A man's work is nothing to it.）で、誰から指図されるわけでもなく（my own boss)、20年も馬のように労働に励み、夏至の時期ですら働き足りないと感じてきたし、後任者が誰だろうと、自分以上に農地に情熱をつぎ込み、自分以上に収穫を得る者はいない、「この世（神の造り給いし世界）には、勤勉と安らかな心にまさる恵みはない」（There's no blessing in God's world like hard work and a quiet mind.)、一日中することがなかった（第１次大戦の）抑留時代は死ぬほど辛かったと、ネッドは過ぎし日々を振り返る。骨身を惜しまず働き、「農地にその苦労の足跡を残した」（You've left your mark on the farm.）と、エレンはネッドに労いの言葉をかけ、「私たちは二人とも、勤労を馬鹿みたいに自慢していた」（We both took a foolish pride in hard work.）と共感を表明する。しかし、同時にまた、その努力も「水の泡になる」（go for nothing）かもしれないと、エレンは心配する。ネッドはそれを打ち消して、「労働はそれ自体に報いがある」（Work is its own reward.）――「徳行」（Virtue）を「労働」に置き換えた、諺のもじり――と応じる。ルークの将来をエレンに訊かれたネッドは、上の空でぼんやりしている時もあれば、アイルランドの若者の中で一番熱心な働き者の時もあり、彼の性格は「さっぱり分からない」（It beats me.）と匙を投げる。エレンは、ルークがバイク購入に20ポンド使ったことや、エレンの羊５頭を売り払ったこと、グレイハウンドの賭けに手を出していたことをネッドが知っていたか尋ねると、高値を吹っかける売主の「カモ」（sucker）になったことは知っていたが、羊の売却や賭けについてはいまさら「騒いでも」（making a row）始まらないし、「甘やかされた子ども」と言えばすべて察しがつくでしょう、と口を濁す。ルークがハミル家に頻繁に出入りしていることぐらいはせめて教えてほしかったわ、とエレンは恨み事を言い、昔のように「エレン」と呼びかけず「ケアリー

夫人」の呼称をネッドが使うことにも不快感を示す。ルークが成長するにつれて、下男が女主人に使うには（親密すぎて）不適切だからだ、とネッドは反論し、もしもルークがサリーと２匹の仔猫のようにじゃれ合っている情報をエレンに逐一伝え、エレンが口出しする時期を誤ったなら、十中八九、ルークはサリーとの結婚に踏み切ってしまっていただろう、と弁明する。サリーは無邪気な仔猫ではないわ、とエレンが反論すると、たしかにネズミを殺しかねない気性だけれども、利口で正直者で、ルーク以上に「常識」（あるいは「根性」）［gumption］がある娘だと評価したうえで、ルークのスパイ役は自分の仕事ではなく、昔ルークをおんぶして畑を歩き回り、仕事の方法を教えていたころはルークが好きだったが、今では昔よりも分別を失っている、と嘆く。息子の世代はみんな頭がおかしいのよ！とエレンは訴えるが、ネッドは、まだ若者への信頼を捨ててはおらず、言うことをきかない鹿毛色の馬も、うまく調教すればおとなしい馬に変身するものだ、と説明する。ただし、それには障害があり、たとえばルークは近傍で開催されるダンス・パーティによく出かけており、少量でもポティーン（密造ウィスキー；日本風に言えばイモ焼酎やどぶろく）を飲んでジャズ・バンド演奏のなか、無分別なフラッパー[(2)]と一緒に踊るのは、火災保険もかけたくない（爆薬のような）危険な積み荷だ、とネッドは指摘する一方、ひどい振られ方をすれば（If he makes a bad spill）ルークはすぐにおとなしくなるだろうし、いまや「新時代」(a new age)で「新世界」(A new world) なのだから、ルークをガラスの陳列台にしまっておくわけにはいかない、と諭す。「善良で分別のある娘」とルークが結婚して落ち着くことをエレンが願うと、そんな娘はいまどきなかなか見つからない、とネッドは応じ、さて自分は帰宅すべきなのか、このまま居残るべきなのか、はたまた出直すべきなのか、いずれにしても、干し草の仕事をやり残しているので「心を痛めている（気が咎める）」(It goes to my heart)、と語る。ピーター伯父の来訪予定がなければ、ネッドと協力して干し草の仕事を終えられるのに、とエレンも残念がる。

マグが登場。今から修繕に出した靴を受け取り、婦人服屋にも寄りたいので、給金を今すぐ貰いたいと申し出る。エレンは了承し、自室へ向かう。牛の乳搾りの仕事をほったらかしで出て行こうとするマグは、首になったのだからすぐ出て行くのは当然で、６人分の仕事を半人分の給金で請け負って、「糸で自由に操られている大鱈」（she'd a big cod-fish on a string）のようなネッドなら首にならないでしょうけどね、と皮肉る。自分はそれで満足している、とネッドが反論すると、ちょっとした御愛想や笑顔ですぐ満足してしまう男たちがいるわね、とマグは言い返し、お前が男を満足させるには相当、笑顔を見せねばならんだろうな、とネッドも負けてはいな

(2)　1920年代の、自由を求めて行動や服装が突飛で生意気な十代後半の現代娘。

い。ルークがこの家の実権を握れば（gets into the saddle）、あんたの20年の家畜労働も無駄骨になるわよ、とマグが脅すように言うと、ラビットの家に足繁く通っただけあって、口調がラビットそっくりだ、とネッドはやり返す。＜自分の靴磨きもしない女のために昼夜働いている＞と、9平方マイルの教区じゅうで笑い草になっているくせに、と痛いところを突かれたネッドは、早く出て行くようにマグを促す。あんたとルークは死ぬまでそりが合わない（yourself and Luke won't die in double harness）気がするし、私が出て行く先はそれほど遠くではないかもね、とマグがうっかり口を滑らせると、お前は生まれつきラビットとお似合いだ（You were cut out by Nature for Rabit Hamil.）、と二人の親密な関係をすでに見抜いていることをネッドは暴露する。必死に取り繕おうと怒って見せるマグに、まともな毛長イタチ（「娼婦」の意味もある）ならあんな爬虫類オヤジと番うわけがない（A decent polecat wouldn't pair off with that ould reptile.）、お前はもともとウサギ穴（rabbit-hole）から這い出たのに違いない、とネッドはマグやラビットを口汚く罵る。

エレンが戻り、給金10ポンドをマグに手渡す。間違いがないか数え直すまでもない端金ね、とマグは皮肉を言い、一方的な雇用打ち切りだから未就労の3日分も給金に含まれている旨のエレンの説明に対して、「あらまあ、用意周到なお言葉（立て板に水）！」（My God, aren't you pat!）と、不機嫌な対応を見せ、御上さん同様にゴシップに怯えているネッドのボーナスが増えないのは不思議な話ね（ネッド自身がゴシップの当事者だから口止め料は必要ない、の含み）、お二人が次に雇う下女は（私のようにゴシップをまき散らさせないためにも）救貧院（County Home）出身の三重苦（a deaf and dumb mute）の障碍者がいいわよ、と喧嘩を売る。エレンはマグの「青カビのような態度」（blue-moulding）を相手にせず、マグが乳搾りの仕事を果たしていないことを咎める。乳搾りはネッドに任せ、就寝時までネッドがこの家をうろつく口実を差し上げようと思いまして、と嫌味な捨て台詞を残して、マグは出て行く。

「やれやれ、厄介払いができた（せいせいした）」（That's a good riddance）とエレンは安堵し、「性格に邪なところがある女性ね」（That lady has a bad streak in her.）と洩らすと、「輪をかけて邪な傾向を取り入れるでしょうな、ラビットと契りを交わして（crossing with Rabit Hamil）」と、ネッドは二人が結婚する見込みであることを打ち明け、エレンを驚かせる。ラビットが娘サリーを手放そうと躍起になっている裏事情もこれで腑に落ちた、とエレンは得心する。

自動車が庭に乗り入れる音。戸口に出たネッドは、古いフォードに乗って元気そうなピーターの到着を知らせる。戸外から、まだ独り者かい？と声をかけるピーターに、まだ当分はね、と答え、ネッドは出迎えに行く。たしかにまだ当分はね、とエレンは

独りごちる。

ピーター、登場。元気溌剌たる小柄な男で、控えめに言っても博労(cattle-dealer)タイプ。エレンを見て、ますます若返っているとお世辞を言い、キスをする。エレンは涙こそ見せないものの、泣き声になる。心配してエレンの目を覗きこんだピーターは、（雌鹿の方が適切だと思われるが）雄鹿のような瞳だから健康状態に問題はないと判断を下し、他の理由を詮索する。「青年」（gossoon）はどこにいるのか、とルークのことを尋ねたピーターは、ここへ来る途中の道で出会った若者――バイクのエンジンをかけようと走り回っていた――の脚に見覚えがあったが、小さな農場の倅のルークがライダーの恰好をしていたことに驚き、何度も本当かと念を押す。行き先も帰宅時刻も告げずバイクで徘徊し、ドッグ・レースの賭博やダンス・パーティ通い、おまけに勝手に私の羊を売り払うなど、ルークの素行不良をエレンはピーターに打ち明ける。幼な子を抱え多額の借金を背負い、「のるかそるかの思いで」（to sink or swim）、息子のために苦労してきたエレンにピーターは同情し、（ルークを呼び戻すために？）庭から狼のように遠吠えしてもいい、と叫ぶ。しかしエレンは、自分はまだ若く元気で、蓄えもかなりあるから、忠告されるなら、別の農場を新たに購入して一からやり直すこともできる、と安心させる。ピーターは歩き回りつつ、やはり自分の弟ルーク（ルークの父親も同じ名前だったことが分かる）の倅だ、あんな「ねじれた根性」（mental twist）を母親（＝エレン）から受け継いだはずがない、と父方のケアリー家の血筋を（自分にその血が流れていることも忘れて）非難して憚らない。亡き夫の悪口は言わないでほしい、とエレンは訴え、ようやくピーターは落ち着きを取り戻して、椅子に腰を下ろす。エレンは持ってきたウィスキーが、コルク栓をきつく締めてはいたけれど、１年前の代物で、品質は大丈夫だろうか、とピーターに尋ねる。ピーターは、古いウィスキーの賞味期限を心配して、ルークに会うまでは飲まないと、その場で飲むのを遠慮する。エレンは軽率にも古い酒を勧めたことを詫びてウィスキーをしまい、お茶の準備にかかる。話題を再びルークに戻し、ルークの方はピーターと道ですれ違ったのに気づいたかどうか、エレンは尋ねる。気づいたかもしれないが、エンジンをかけようと突っ走っていたので、向こうからは声をかけなかった、とピーターは答える。バイクのプラグが食器棚にあるのだからもちろんかかりませんよ、と言うエレンの説明に、ピーターは快哉を叫び、ルークは７歳児ほどの知恵もない奴だが、自分が18歳の時にはグラスゴウ（Glasgow）の鋳物工場で１日12時間も働き、週給30シリング（＝１ポンド半）から１ポンドを実家へ仕送りし、市内じゅうの店を回って、残りの僅かな金で固いパンやチーズ屑を買っていた、と昔の苦労話を語り出す。今時の若者は昔とは違い、仕事に身が入らないようにさせる娯楽に溢れているので、落ち着かないんです

よ、とエレンがとりなしても、親世代が味わえなかった恵みを享受できることを有難いと思うべきであり、いつの世も愚か者は仕事に身が入らないものだ、とピーターは反論し、ルークの仕事ぶりについて問い質す。気が向けば熱心に働いているようです、とエレンが答えると、詩人じゃあるまいし、農夫はつねに働く気に満ちていなければならない、農地は子どもを相手にするように、くすぐり可愛がらねば、にっこり笑ってくれないものだ、とピーターは持論を述べる。農地に関しては、ネッドのお陰で、20年前は荒れ地だった土地がいまでは生き生きと輝いている、とエレンは太鼓判を押す。ピーターはここぞとばかりに、これまでにネッドを連れ合いにしようと考えた事はないか、と単刀直入の鋭い質問を投げかける。いろいろと思い巡らす構想があり、真剣な思い（I mean business.）だと言い添えるピーターに、ルークが子どもの頃はよく考えました、とエレンは真情を吐露する。しかし、ネッドに自分を口説く（make a move）ように仕向ける隙は見せませんでした、とエレンは言葉を続け、それは亡き夫ルークがいまわの際に、＜絶対に再婚しない＞と自分に誓わせ、もし約束を破ればあの世から化けて出る、と告げたので、私は「自由の身」（free agent）でないからです、と告白する。それを聞いたピーターは激怒し、化けて出たけりゃ出ればいいが、せいぜい死後半年以内にとどめ、遺された未亡人に一生、黒いクレープの喪章ベールを巻かせるような「ろくでなし」（wastrel）の無茶な約束に、応じるのも守り通すのも愚かなことだ、とエレンの従順さに異議を唱える。歳をとった今となっては約束を破っても意味のないことだけれども、ほんの些細なことで約束を破ってしまいそうで、ネッドにもこの遺言の誓いは話していないから、誰にも他言しないように、エレンは要望する。20年もの大事な年月を無駄にする高価な代償の約束をしてしまったものだ、とピーターは嘆息する。ルークとネッドの関係を尋ねられたエレンは、これまで揉め事はなかったけれど、先のことは分からない、と口を濁す。

エレンからお茶に呼ばれて、ネッドが登場。ネッドは、ルークとラビット親子が道でちょっと口論して騒いでいたが、もう収まった、と知らせる。エレンは、ルークがラビットの娘サリーにプロポーズまでした挙句に捨ててしまったので、サリーが訴訟を起こそうとしている、とピーターに事情を説明する。それを聞いたピーターは呆れ果てて、１ギニー払って名医に診察してもらうべき愚か者だ、とルークをなじる。なぜなら、40年前のラビット一族の様子をピーターは覚えており、「ウサギの知恵とウサギの本能とウサギの道徳心」しか持たない連中で、およそ正気の者は近寄らない野蛮な人間たちだったと、認識しているからである。それでも、製粉所の別の輩と比べればラビットたちはまだジェントリー階級だ、とネッドが水を向けると、その連中の傍に自分の草地を所有しているピーターは、連中は「狂人のヘンリー一族」（The

Mad Henlys）と呼ばれ、父親は2度も精神病院に収容され、息子たちは馬の博労、つまり「ぼったくり屋」（あるいは「追い剥ぎ」）［highway robbers］、4, 5人いる、黒い眼のずる賢い娘たちは、ジプシーみたいに、ハチドリの脛当てにもならないような僅かばかり布地の服を着て、そのうちの一人、ビディ（Biddy）という、ひょろ長い女学生とルークはこの飛行艇（＝バイク：まだこの家に戻ってないのでここにバイクはないはずだが）に乗って毎晩外出し、この間も午前3時まで連れ回した始末だから、今夜か明日にでも親父の狂人ヘンリーがこの家に殴りこんでくる大災難が待ち受けているはずだ、と警告する。

（その狂人ヘンリーではなく）ラビットが、怒り心頭の様子で登場。ルークが娘サリーを、頭をスパナでかち割るぞ、と公道で脅した、とエレンに訴える。実際に殴りつけたの、とエレンに訊かれると、バイクで娘を追いかけて生け垣に追いやった、とラビットは答える。ラブレターを手にここへ戻る道中、サリーはルークに目もくれずにいたのに、ルークがサリーに襲いかかり力ずくで（by main force）その手紙を奪った（⇒実際には奪っていないので、ラビットの事実誤認または嘘）ので、いまから巡査部長（Sargint［＝Sergeant］）に通報しに直行する、とまくしたてるラビットをエレンは押しとどめ、彼をピーターに引き合わせる。さっきまでの悪口雑言はどこへやら、ピーターは起立して、旧友との再会を喜んでラビットと握手を交わし、子どもの頃から（since I was in petticoats）の遊び仲間で、地獄[3] からオマーまで（つまり、コナハト地方からアルスター地方中央部まで）の土地でもっとも親切な男だ、とラビットをエレンに紹介する。その優れた資質（＝親切心）のお裾分けを頂いておりません、とエレンが慇懃に異を唱えると、ラビットは絶対に（「賭けてもいいが」for a wager）無作法な真似などできっこない人物だから、エレンの側に落ち度があるのに違いない、とエレンをたしなめて、ラビットの肩を持つ。そして、裸足で山を一緒に駆け回った子ども時代を思い起こし、「昔のよしみで」（for old time's sake）で一献傾けようと、エレンに酒を注文する。なごやかな気分になったラビットは、何の屈託もなかった往時に思いを馳せ、栗色のアナグマを仕留めた時に噛まれた古傷がまだ太腿に残っている、と思い出話を始め、ピーターもしきりに相槌を打つ。酒（ピーターが飲むのを拒絶した、例の古いウィスキー）をラビットに渡して、ピーターだけでなく私とも昔は仲良しでしたわね、とエレンは声をかける。ラビットは同意しつつも、ルークが山に標札を立てて宣戦布告した、と蒸し返

(3)　チャールズ1世を処刑し、「イギリス共和国」（The Commonwealth of England）の護国卿（Lord Protector, 1653-58）となったクロムウェル（Oliver Cromwell, 1599-1658）は、アイルランド植民に際して、アイルランド人は「地獄へ行くか、コナハトに行くか」（"to Hell or to Connacht"）、すなわち死ぬか、シャノン川より西の土地へ移住するかを迫った、と言われる。したがって、コナハト地方は地獄に匹敵する貧窮地を意味し、地獄の同義語と推測される。

す。ルークはお宅のサリー同様、自分のことばかりに抜け目がなく、親世代は哀れなことに何の権限もない、とエレンが嘆くと、我が意を得たりとばかりに、ラビットも賛同する。ピーターも、わしが口を開くと、子どもたち７人（４男３女）から馬鹿にされて笑われる始末で、わしの取り柄は子どもたちの教育費を払うことだけだ、と自虐気味に語る。ラビットは酒を飲み干し、おれは正直者ネッドに何の恨みもない（I've nothing agen［＝against］honest Ned Shay.）し、この内戦（ハミル家とケアリー家の確執）が早期解決しないとしても自分のせいではない、と弁明する。ピーターはラビットを「地獄からオマーまでの間の、最も立派な男」と再び同じ言い回しで持ち上げて、確執の「真相」（rights）を話すように促す。エレンからの問いかけに答える形で、病気で死にそうな自分の妻をエレンが看護してくれただけでなく、その葬儀費用を負担してもらったこと、息子が雇い主に窃盗を働いた時はエレンがマケイン大尉（警察署長？）と面会して保釈して貰ったこと、20年以上も山での狩猟を無償で許可して貰って生計を営むことができたことを認め、「主の報いがありますように」と、その都度、感謝の言葉をラビットは述べる。しかし、謝辞だけでは不満が収まらないエレンは、ラビットがサリーを利用して、無知で未熟な息子ルークをおびき寄せる罠を仕掛けた、と訴える。他の者なら聞き捨てならないきつい言葉だ、とラビットは反発する。

外出用の、丈の短いスカート、安物のピンク色の靴下に着替えたマグが姿を見せると、エレンはマグを指差して、マグを家に迎え入れるためにサリーを是が非でも手放したいとラビットが望んでいるのは分かっており、マグこそがこの騒動の原因なのだ、とエレンは決めつける。私は関わりがない、と言い返すマグを、ラビットは厳しい口調で黙らせる。エレンは、ラビットとマグの結婚に異存はないけれども、二人の結婚話のせいで我が家にひどい迷惑をかけないでほしい、と迫る。この「張り手」（a felling blow）のようなきつい言葉も、エレンが「今は亡き者たち」（them that's gone）に優しくしてくれた恩義に免じて、受け入れよう、とラビットは答える。必要ならば二人の力になってもいい、とエレンは態度を軟化させ、ラビットはマグに、エレンに歩み寄って詫びを入れるように、促す。躊躇するマグに、お互いに歩み寄りましょう、とエレンからも近づく。今後とも仲良くやっていきましょうね、そしてお二人が「安楽な暮らし」（a bed of roses）ができますように、とエレンは祝福し、もしマグが余計な口出しをするなら（ハリエニシダのベッド［a bed of whins］⇒）「針のむしろ」のような目に会わせる、とラビットは応じる。さらにラビットは、（雇用契約通りに）もう３日間ケアリー家で働くようにマグに命じ、（反対したところでラビットの怒りを買うだけだと観念したのか）マグの方からも頼み込むので、エレンは了解する。修繕を終えた靴の受け取りは明日に延ばし、今すぐ着替えて乳搾りをします、とマグは気詰

まりなその場から逃げ出す。

サリーにはマグとの再婚話を洩らさないでほしい、とラビットはエレンに頼み、その見返りに、ルークの婚約破棄の件をサリーに納得させる、と申し出る。サリーの潮流にぴったりの毛鉤をつねに帽子に備えている（サリーの心境の変化に応じた策がある、の意）、とラビットは自信たっぷりである。

ラブレターを手に、サリーが戻る。ルークにひったくられそうになったが、ぎゅっとつかんで離さず、男相手に喧嘩するのは好きだから、やられた分だけやりかえしたわ、とサリーは男勝りに話して、手紙を１通差し出すが、息子の筆跡に間違いないので、中身を読むまでもない、とエレンは受け取らない。（婚約解消を受け入れさせる約束を果たすように）エレンに話の水を向けられたラビットは、母親が亡くなった時まだ小さかったサリーは祖母に預けられ、まだ聞かされていない話だから、エレンの方から可哀想なサリーに話してやってほしい、と躊躇する。死者を掘り起こしたくないから、やはりラビットが打ち明けるようにエレンは促す。急に「可哀想なサリー」と呼ばれて驚き、事情の変化が呑み込めずに困惑するサリーに、ラビットはついに観念して、ラビット親子はエレンに「多大な恩義を受けている」（under a great debt of gratitude）こと――すなわち、病床の母親を看護し、経帷子をまとわせてくれたこと――を告白する。初めて聞かされる話に驚きつつも、「たまたま自分に都合のいいような、なんだかよそよしい口調でしか」（only in some remote way it happens to suit his own purpose）語ろうとしない父親に対して、なにか裏の狙いがありそうだと不信感を抱いたサリーは、燃やしても構いません、とラブレターの束をエレンに渡し、残りの手紙は私が燃やします、と言い添えて、急いで立ち去る。予告通りに事が運んだことをラビットは得意がり、娘の目に涙が浮かんでいた、と言って、後を追う。

ラビットがいなくなるや、あいつは「地獄からオマーまでの間の、最悪な男」、「樽一杯のヘビのように、心が歪んでいる」と、ピーターはラビットの悪口を言い、サリーのことを不憫がる。自分の再婚話が娘の耳に入りはしないかと怯えているんだよ、とネッドは理解を示し、とにもかくにもラビット親子の魔の手から逃げ出せたと安堵するエレンに、今後はサリーからルークに話しかけることはないだろうから、ルークの方から近づかない限りは大丈夫ですよ、とネッドは請け合う。

普段着に着替えたマグが戻る。内密にお話しがしたい、としおらしく申し出るので、エレンはマグと退出。あいつ（＝ルーク）は母親を路頭に迷わしかねん、とピーターは行く末を案じ、亡夫の「遺言書を書き換えて」（doctor the will）、農場の「生涯不動産権」（a life interest）をエレンに移そうと考えていると打ち明けるが、そのような不正行為はエレンが許さないし、何でも秘密を嗅ぎつけるラビットに遺言の中身

は洩れている、とネッドは書き換えに反対する。いまのようにルークに気ままに「のさばらせておく」(let him run wild)くらいなら、道路でわしのフォード車に激突させて脚を不自由にするか、殺してしまうかする方がましだ、とピーターは物騒な発言に及ぶ（1913年の事故以来、車椅子生活を余儀なくされた劇作家シールズだから許される科白であろう）。無知で厄介なルークと短気なピーターが衝突するのは目に見えているから、フォードに乗って家路につく方がいい、とネッドは忠告するが、ルークに会って「はっきりと言ってやる」(give him a bit of mind)までは絶対に帰らんぞ、とピーターが怒り出すので、ネッドは説得を諦める。

エレンが戻ると、早々にピーターは、ルークは父親の遺言をすでに見たか、尋ねる。まだ見ていないけれど、弁護士に相談すると話していたから、近々目にするでしょう、とエレンは答える。いますぐ見たい、と眼鏡を取り出すピーターに、自宅に置いておくと心配なので、遺言書はマケイン大尉の金庫に預けている、とエレンは教える。今からすぐに車で遺言書を取りに行くことをピーターは提案し、エレンも了承する。出かける前にしばらく身繕いをしたい、とエレンは退場。

エレンが中座した隙に、ピーターはネッドに食ってかかる。エレンの餓鬼（＝ルーク）がまだ子どものうちにエレンに手を出さなかったとは、「賞状ものの大馬鹿野郎」（a prize idiot）で、銃殺に値する犯罪だぞ、と喉をからし、お茶のお代わりを要求する。同意も得ずに女主人に手を出すのが犯罪だと常々思っていました、とネッドが弁明すると、エレンはお前が頼りなんだから、大いに見込みがあるぞ、とピーターはけしかけるが、「見込み」（chance）があると言うよりむしろそのことは「障害」（handicap）であり、エレンの方から誘ってくれることもできたはずだ、とネッドは反論する。ピーターは思い余って、亡夫との誓いの件を洩らそうと、墓場まで秘密を持って行けるか、とネッドに尋ねるが、エレンに隠し事があるならそれは聞かせたくない話だ、とネッドは取り合わない。ピーターはネッドを「朴念仁」（a wooden man）、「（霜がおりたカブラ⇒）冷たいボケナス」（a frosted turnip）呼ばわりし、立派な女性が朽ち果てるのをみすみす取り逃がすようでは、エデンの園にイヴといたとしても、（神の教えに背いて楽園を追放されることなく）ずっと居残っていただろう、と皮肉るが、「むしろその方がましかも」（And maybe just as well.）、とネッドは受け流す。例の「若者」（gossoon）を甘やかさず、トネリコの杖でこっぴどくぶちのめしてやるべきだった、とルークへの対応を批判すると、あなたがここで雇われていたなら、さぞいろいろな仕事がこなせたでしょうね（⇒私は農作業で手一杯で、ルークの躾役まで手が回りませんでした）、とネッドは皮肉で返す。あの「若者」（gossoon）は頃合いを見計らってぶん殴ってやるべきだった、と依然としてピーターの怒りが収まらないうち

に、ルーク当人がバイクを押して登場。腹を立て、汗と埃にまみれている。

ピーターは、彼がルークか尋ね、ライダーの恰好をした小さな農場主など見たことがない、と呆れる。ぼくがどんな恰好をしようがあんたに関係ないだろう、この恰好に使った金をあんたが払ってくれるのか、と喧嘩腰のルークに、自分はどうなんだ？とピーターは鋭く切り返す。払ってくれとあんたに頼んじゃいない、とルークが逃げを打つと、お前の母親が額に汗して得た金を使って払ったことぐらい分かっている、とピーターは追い打ちをかける。神様はお前の思う通りにさせるはずがなく、いつか付けが回ってくるぞ、とピーターが説教口調になると、母さんが留守でその説教を拝聴できないのは残念、母さんも説教上手だけど、伯父さんの書記役までは手が回らないのでね、とルークは皮肉る。ピーターが歯をむいて立ち上がり、「もう一遍ほざいてみろ！」（Open your fool face to me again!）と挑発すると、ルークもスパナを取り出して身構える。ネッドはピーターを宥めるが、「狂気の記念碑」（monument of insanity）のようなバイクを見て「我慢する」（keep his temper）ことなどできん、とピーターは言い返し、二人揃ってティンカーみたいに喧嘩しても始まらない、とネッドは説得を続ける。しかし、余計なくちばしを突っ込むな、とルークに横柄に怒鳴られたネッドは居住まいを正し、身をこわばらせて黙りこむ。ネッドの体面を慮って、ピーターは椅子に腰を下ろす。ルークは、フォード車を「狂気の記念碑」呼ばわりされたらむかつくだろう、とピーターに問いかけ、毎週５か所の市場巡りに乗り回すフォードは「生活の一部（＝生活必需品）」だ、とピーターは主張する。それなら僕にとってもバイクは「趣味の一部」であり、一日の畑仕事を終えて夜のドライブを楽しむことが「記念碑的な狂気」（monumental insanity）と言うのなら、アイルランド中が一大精神病院に違いない、とルークは反論する。バイクを乗り回す経済的余裕はお前にも母親エレンにもこの農場にもない、と言っているんだ、とピーターが指摘すると、「６ポンドの趣味」（＝バイク；実際は20ポンドの趣味であり、ルークの虚偽発言）の余裕も生まないような農場なら、耕作を放棄してカラスにくれてやればいい、とルークは言い返す。土地に対する誇りがあるなら労働が趣味になるはずだ、とピーターが突っ込むと、「退屈な骨折り仕事」（drudgery）に誇りなどまったくない、アイルランドの青年が赤土に寄せる熱情を謳う詩歌はすべて「たわ言」（bunk）にすぎず、日夜、「身を粉にして」（tearing our guts out；「はらわたを引きちぎるように」の意）働いてもまともな暮らしさえもたらさないような忌々しい代物（＝農作業）は「奴隷仕事」（slavery）にすぎず、「支那人ども」（Chinamen[(4)]）にさせるべきだ、と農場での労

(4)　現代のPCではChinese（people）と表現されるべき差別語。初演の1930年直前の時期、中国は国民党と共産党の対立による混乱状態にあり、列強の介入を招いていた。

働に誇りや喜びを感じていないことをルークは表明する。「6ポンドの趣味」とやらは、ラビット親子や「狂人ヘンリー」の親子と手を切らなければ、もっと高いものにつくだろう、ブリガム・ヤング[5]（Brigham Young, 1801-77）のようにお前は国中に女を作っているようだし、「趣味」や「アイルランドの自由」の意味を履き違えているとすれば、自由のために戦死した者たちはみな、愚か者で、（アイルランド）民族の敵とでも、お前は思っているのだろう、とピーターは非難する。国のために戦死した連中はよっぽど大義が見つからずに困っていたのだろう、自分ならスパイク・アイランド[6]（Spike Island）のために戦死する方がましだ、とルークはやり返す。農場を手に入れたら、カラス麦やジャガイモでなく、ガソリンや密造酒、バイクや皮のヘルメットでも栽培したらどうだ、とピーターが侮辱すると、ついでに年寄り連中も栽培しよう、ブライアン・ボルー[7]（Brian Boru, c.941-1014）だの大風[8]（ビッグ・ウィンド［Big Wind］）だの、霞のような言い伝えを食って生きている年寄り連中を栽培するにはもってこいの国だから、とルークは応じる。ドッグ・レースのグレイハウンドやアフリカ黒人のダンスにうつつを抜かすよりはましだ、とピーターが言い返すと、現代のアイルランドではグレイハウンドやバイクを所有することもダンス・パーティに出かけることも煙草を吸うことも日没後に女の子に声をかけることも大罪（a mortal sin）とされるが、バイクも存在せず大いに神聖だったその昔に800万以上の人口を誇っていたのであり、長い白髭を蓄えていないこと（＝若いこと）がこの国では一番の大罪とされ、40歳は25歳を60歳は40歳を70歳はすべての人間を嫉妬して憎んでいる、とルークは上の世代を批判する。未亡人（＝ルークの母）の羊を盗み、ビディ・ヘンリーと夜遊びするのも新しい時代の美徳かね、とピーターが話題を転じると、ルークは母親がピーターに告げ口をした、と怒り出し、バイクや皮のヘルメットではなく、僕が成年に達して自分の財産を得ることを母親は心配しており、財産を得たなら誰にも文句は言わせない、と断言する。裸族の野蛮人相手に話をする方がま

(5)　米国のモルモン教の2代目の指導者。モルモン教は、1830年にジョウゼフ・スミス（Joseph Smith, 1805-44）が「モルモン経」（Book of Mormon）を聖典として始めたキリスト教の一派で、「アメリカのモーゼ」「モルモンのモーゼ」と呼ばれたヤングがユタ州ソルトレイクシティを築いてここに本部を置いた。初期には一夫多妻を認めていたが、1890年に廃止された。ヤング存命中は一夫多妻制で、彼は55人の妻を娶った。

(6)　解釈は2通り。②の可能性が高い。①スパイク島。コーク州コウヴ湾にあり、コウヴの南の沖合の島。現在は現代アートの国際的センターとして観光名所――瀬戸内海の直島のように――で、ケネディ埠頭からフェリーが就航している（大人料金18ユーロ）。②競走馬「スパイクアイランド」。1919年生まれの鹿毛の牝馬で、1922年にカラ競馬場で開催されたアイリッシュ2000ギニー（芝、1マイル）で優勝した名馬。http://racedb.com/p/047611.html

(7)　マンスター地方を支配した王で、アイルランド上王（High King）。クロンターフの戦いで勝利を収めたが、戦死した。

(8)　1839年1月6日の午後にアイルランドを襲った強風。推定死者250～300人、ダブリン北部の家屋の4分の1近くが多大な損害を受け、船舶42隻が難破した。風速51メートル以上、最低気圧918ヘクトパスカルを記録し、300年ぶりの暴風だったとされる。

しだ、とピーターはルークとの話を打ち切る。

バイクをいじっていた人間を見なかったか、とルークに訊かれたネッドは、「余計なくちばしを突っ込むな」と先ほど仰いませんでしたか、と皮肉で応酬し、無論、若主人（young master）のお尋ねには答えねばなりませんが、あなたのことを実際どう思っているかは話しません、と暗に「主人」と見なしていないと匂わせる。ルークは、ようやく「告げ口屋」（news-carrier）の正体が分かった、6時に帰宅すると言っておきながらピーター伯父さんとお前はお茶を飲んでいる、とネッドにあらぬ疑いを向ける。ピーターはネッドに、このろくでなしを庭に連れ出してあばら骨1本残らずぶちのめしてやれ、と逆上する。「告げ口屋」の罵声に驚愕したものの、冷静さを取り戻したネッドはピーターを宥め、ルークや凶器のスパナが怖いからではなく、昔、ルークを背中におんぶして畑を歩きまわったことがあるからルークを殴ったりしない、と答える。悪気はなかったんだ、と繰り返し弁明するルークに、20年間辛いながらも幸福な日々を過ごし、今や農地も整備されたからここを立ち去る潮時だ、気の合う作男を探せば（Get one of your own kidney）、午後6時と言わず4時にでも農作業を切り上げるだろう、厚かましさや無駄口でなく、知性（intelligence）を身に付けなければ何にもならない、とネッドはルークに告げる。

エレンが外出着に着替えて登場。ネッドは行き先も言わずに立ち去る。ルークがネッドを「告げ口屋」呼ばわりした事情をピーターがエレンに説明すると、ネッドが昔、ルークの子守りを手伝ったことをエレンは持ち出す。近隣10マイルの人間は誰か彼も、頼みもしないのに僕の子守りに手を貸したという話ばかりだ、とルークは癇癪を起こす。それで憂さ晴らしが済んだ（you've blown off all your steam）のなら、これから外出する、と言うエレンに、僕が部屋にいる間にバイクをいじったのは母さんだろう、とルークは疑いを向ける。エレンは否定し、ピーターと外出しようとする。ルークが二人の行き先を執拗に問い詰めるので、マケイン大尉の家よ、とエレンは答える。母親が自分を羊5頭の窃盗罪で訴えに行く［第1幕終盤参照］のだと早合点したルークは、慌てて自室に引き返す。ピーターは、エレンを誘拐して1か月この家から連れ去っておくべきだった（そうすれば、少しはルークも懲りて自立できたかもしれない、の謂いか？）と、辛辣な軽口をたたくが、エレンはむしろ辞めていったネッドのことが気がかりで、少しも怒りの表情を浮かべていなかったことをピーターから聞いて、ネッドの決意の固さを悟り、心痛を深める。

ルークが羊の売却代金10ポンド（バイク購入に使われたはず。別のへそくりでも貯めていたのだろうか）を手に戻り、エレンに手渡し、もう二度と羊を盗まないと約束する。ルークはこれで一件落着と思ったものの、エレンとピーターがマケイン大尉の家へ向かおう

とするので、用件は何なのか、ルークは問い質す。預けていた、ルークの亡き父親の遺言状を引き取りに行くのだ、とエレンが答えると、どうして最初からそう知らせずに、謎めいた態度をとったのだ、とルークは腹を立てる。帰宅したら遺言状を渡し、自分の心積もりを話すから家にいるように、エレンはルークに命じて、ピーターとともに出かける。バイクをいじくった犯人が分かったら警察署に出向いて逮捕させるからな、と、二人の後ろ姿に向かってルークは叫び、バイクを点検する。幕。

第３幕　第１幕、第２幕と同じ設定[(9)]。マグが大きなコップで卵１個をといている。ラビットが登場。ネッドを追い出してこの家を粉々にするという誓いを有言実行し、残った最後の梁（＝エレン）も鋸で切ってやる、と意気軒昂なラビットにマグも調子を合わせる。自分たちの親密な関係をエレンがとっくに知っていたことに関して、なぜエレンに秘密を漏らしたのだ、とラビットが問い詰めると、自分は天に誓って一言も喋っていない、とマグは嘘をつき、私たちの「微妙な空気を読んだ」（guessed how the land lay）ネッドがエレンに話したのだ、とごまかして、最後の給金10ポンドを差し上げるつもりだ、と機嫌をとる。ラビットはマグの郵便局の預金残高を尋ね、利息込みで30ポンド以上と知ると、妻に迎える女性には50ポンドの持参金を期待していたが、合わせて40ポンドでもよしとし、預金を下ろして自分に預けるように指示する。マグは承諾し、男が何をいつ望んでいるかを理解するのが女の務めであり、私のように溶き卵を正しく作れる女は50人に１人もいないし、卵酒を作る際にミルクより先に酒を加えてしまう誤りを犯す女が多い、と料理の蘊蓄を語る。ラビットがまだ狩猟の罠を背負っているのを見て、荷を下ろすように勧め――道理でいつも肩が凝ったわけだ、とラビットは納得する――ポケット（fob）に懐中時計があるだけでもエネルギーを消費して体力の負担になるのよ、と言いつつ、マグはミルクをまず入れて激しくかき混ぜる。娘サリーはウサギ１羽で９通りものスープを拵えると、エレンには吹聴したが、実は９通りの毒物（poison）――腹を下すほど不味い代物の意――であり、今まで死なずに生き延びてきたのが不思議なくらいだ、と娘の料理の下手さ加減をラビットは嘆く。仕上げにウィスキーを加えてかきまぜたマグは、卵酒を一気飲みする（quaff it off）ように勧める。ラビットは従い、「コクがある」（opulent）と褒める。結婚すれば毎日３杯それを飲み、別人のようになるわ、とマグが言うと、それなら世話になるのは早ければ早い方がいい、サリーは明日、スコットランドの姉の元へ旅立つ、とラビットは伝える。料理を終えたマグは給金10ポンドをラビットに

(9)　古典的な劇作術の「三つの統一」、すなわち「場所の統一」、「時の統一」、「筋の統一」が守られていることが分かる。

渡す。丸１日かけてドライブし、海辺で２泊ほどの贅沢な新婚旅行を計画しているので、10ポンドではたいして使い出がない、と言いながらもラビットはその金を受け取る。挙式当日が晴天で、人目につくようにスピードを落としてドライブし、車にはリボンを飾ってほしい、とマグは希望する。卵酒の酔いも手伝ってラビットがマグの体に密着するように近づくと、マグは尻込みする。

そこへ娘のサリーが登場。なんの「おふざけ」（antics）のつもりなの、マグに「飛びかかろうとしていた」（trapezing after）のはどうして？と単刀直入に訊かれたラビットは、おもわず白を切る。ルークならバイク修理の件で鍛冶屋の仕事場へ、エレンとピーターはマケイン大尉の家へ出かけて留守だ、と説明し、ここへは骨休めに（to rest my limbs）ついさっき寄ったところだ、とラビットは言い繕う。立ち寄った家ではどこでも卵酒を飲むの？コップもスプーンもあるし、顎に卵酒の残りが付いているわよ、と指摘されると、ラビットは慌てて顎を拭い、卵酒はエレンがピーターに拵えたもので、ピーターが飲んでいる姿を見た、とラビットは嘘を重ねる。サリーはさらに、マグの目にこれまでにない輝きがあり、頬も紅潮しているわ、と追及する。サリーはかなり前から二人のやりとりを立ち聞きしていたことを告げ、10ポンドをラビットに貢ぐことになったマグに対して、お気の毒さま、と伝える。嘘がばれたうえに娘に情事を立ち聞きされた恥辱で、ラビットは、サリーの「陰口」（backbiting）や「中傷」（calumny）「無礼」（imperence）にはもう我慢がならん、とまくしたてるが、明日には私のベッドは空っぽだから、リボン付きの車をどうぞ手配していいわ、と言い捨てて、立ち去る。あんな娘と同居するよりは顕微鏡の下で暮らす方がまだましだ、くだらん映画の悪影響で、子どもたちが狐のように抜け目なく（cute）なっている、とラビットは憤懣やる方ないが、マグの方は、サリーが二人の結婚をそれほど悪く受け止めていない様子に安堵する。

サリーが戻り、狂人ヘンリーと娘の来訪を告げる。精神病院の入院歴があり、本来まだ入院すべきヘンリーに宛てて、ラビットがルークと娘ビディとの交際を密告する手紙を書いているところを目撃していたサリーは、ルークの居場所を絶対に教えないようにラビットに警告して立ち去る。

重い棍棒を手にした、大柄で粗野な男ジョン・ヘンリーと怯えた様子の小柄で着飾ったフラッパー娘ビディが登場。バスでこの村に到着し、道案内を受けてこの家を訪ねてきたヘンリーは、ルーク・ケアリー青年（the spalpin［＝spalpeen］を探している、とラビットに話しかけるが、ラビットは要領を得ない頓珍漢な応対をしてヘンリーを怒らせるものの、とにかくここはケアリー家ではないこと、ケアリー家は３マイルほど先の橋の左側だと教える。さらに、ラビット・ハミルについてヘンリーか

ら尋ねられたご当人のラビットは、教会に通う立派な男で、街道から約10マイル入った山の裏手の家に、ケアリー家の息子と結婚予定の娘と同居している、と伝える。ケアリー家のその息子はバイクを持っているか、との問いには、そいつが持っているのは蒸気ローラー（a steam-roller）だと、ごまかす。ヘンリーは娘ビディを連れて、（嘘のケアリー家を目指して）退場。

獰猛なインディアンのようなヘンリーにルークが八つ裂きにされてしまう、とマグは怯え、ビディが未成年だからルークは刑務所送りになるだろう、とラビットも深刻に受け止める。

興奮した様子のルークがバイクを押して登場。ヘンリーを呼び寄せた張本人はラビットだと見抜いたルークは、殺してやる、と叫びながらラビットに突進し、ラビットは逃げ出す。ラビットを擁護するマグにもルークは罵声を浴びせ、マグも追い出す。

サリーが登場。同じような剣幕で追い払おうとするルークを制止して、ヘンリー父娘がルークを探していること――二人を呼び寄せたのはサリーかラビットのどちらかだとルークは推測し、サリーは自分の関与は否定し、ラビットの可能性を認める――ネッドが二人を待ち構えて声をかけ（waylay）、とりあえずネッドの自宅の小屋へ案内するように指示しておいたことを伝える。自分はヘンリー父娘とは一切関わりがない、と強弁するルークに、ヘンリーが喧嘩腰（on the warpath）になっているのは、17歳にもならない小娘をバイクに乗せて午前２時近くまで連れ回したからでしょう、とサリーが追及すると、午後10時に送り届けようとしたけれど、海岸通りを案内してと、ビディに頼まれ、その途中でバイクが３遍も故障したので遅くなった、僕のせいではなく、バイクから降りようとしなかったビディの責任だ、とルークは弁明する。ビディは10時に帰宅するのを望んだけれども、素敵な夜だったから海岸ドライブに自分が誘ったとヘンリーに話して、潔く（be a sport）自分で全責任を引き受けなさい、とサリーは勧める。すでに一度ヘンリーから交際を注意され、今度また娘を連れ出したら血を見るぞ、と警告を受けていたこと、たまたまグレイハウンドの仔犬の様子を見に行く途中でビディに会い、バイクの後部座席にビディが飛び乗って降りようとせず、蜂の巣を振り落とす以上に厄介だった、とルークは懸命に自己弁護する。ヘンリーが待っているネッドの小屋に自ら赴いての談判を勧めるサリーに、ヘンリーとの直談判は絶対に嫌だ、狂気を秘めたでかくて醜いあの男が怖いんだ、とルークは抵抗する。ついには、こんな忌まわしいもの（＝バイク）なんぞ買わなければよかった、ネッドは辞めて出て行くし、母さんも家を去る話をする始末で、死んだ方がましだ、とルークは涙を拭いながら嘆く。私も出て行くわ、ラビットが奥さんを家に入れるから私も姿を消すわ、とサリーは打ち明ける。

自動車のモーター音が聞こえ、ルークは怯える（[Your] nerves are all in your mouth.）が、エレンとピーターが乗った車よ、とサリーは安心させ、ビディに非があるのなら、男らしく立ち向かい（Stand your ground like a man.）、とことん話し合う潮時よ（Now's the time to've it thrashed out）、とサリーはルークを激励しつつも、自分と同じように馬鹿なフラッパーの小娘に近づかないように口が酸っぱくなるほど言って聞かせたのに、あんたときたら馬鹿のチャンピオン（a championship idiot）なんだから！と、愚痴をこぼす。

エレンが登場。ヘンリー父娘の来訪と、ピーターは二人に会いたくない旨を伝える。ルークは恐怖で震え出し、自分は部屋で待機して、もしヘンリー父娘が僕に落ち度があると言い出したなら、出て来て談判する、と尻込みする。意気地の無いルークを見限ったサリーは、まず自分が話し相手になる、と了解する。ルークはその場を逃げ出す。

サリーは、ヘンリーとはさほど面識はないが、精神病院入院歴があるヘンリーをルークが恐れていて、私とルークの関係はもう終わったから心配は御無用です、とエレンに説明する。

ネッドがヘンリー父娘を案内して登場。ヘンリーはルークのバイクを見て激高し、ルークを出せ、と迫るが、家の付近にいると思う、とエレンは不在を装い、ヘンリーに用向きを尋ねる。16歳を少しすぎた娘を連れ回して午前3時に帰宅させた、とヘンリーは非難し、前にも一度家に来ていたから追い払い、また来たら殺してやる、と言い渡しておいた、その約束を守るためにやって来た、と憤怒をあらわにする。そう怒っていてはこの事態を正しく理解できないし、この家で人殺しなどさせません、とネッドは仲裁に入る。愚かなルークの肩を持つわけではないけれども、ビディぐらいの年の娘たちがバイクに乗せてよ、とルークにせがんでいるのを見たことがあり、二度と近づくな、との警告でたしかに十分だったはずだが、ルークがあなたをわざわざ怒らせるような真似をするとは思えない、と言って、ビディの方に落ち度があったのでは、とネッドは暗示する。ビディはめそめそと泣き出す。作男のネッドではなく、ルークに会いに来たのだからルークを出せ、とヘンリーは迫る。ルークを呼ぼうとするエレンを制止して、今度はサリーが仲裁に入る。

サリーはビディに、大の大人たちに殺し合いをさせないで、すっかり打ち明けなさい（cough up）、誘われもしないのにルークのバイクに飛び乗ったとき、私は近くで目撃した（事実でなく、はったりと思われる）、ルークは草地のグレイハウンドの仔犬を見に行く途中で偶然、ビディに出会って、ビディの方から「6月の蜂のように」（like a June bee）軽やかにバイクに飛び乗ったのよね、と問い質す。ヘンリーから、本当か、と訊かれたビディは否定する。ビディは、製粉所の近くでルークと会った、と言い繕

うが、そこで落ち合う約束をしていたか（By appointment?）と、問い詰められると言葉を濁す。ヘンリーが重ねて、偶然会ったのかデートの約束をしていたのか（by chance or by tryst）、強く返事を迫ると、ビディは「偶然だった、と思う」と白状する。命令もされないで自分からバイクに乗ったのなら、お前のはらわたを引き出すぞ、とヘンリーは逆上する。そんな風に脅したら本当のことが言えなくなるわ、バイクに乗ったにしても、赤の他人のバイクに乗ったわけでもないし、脅さなければ、本当のことを打ち明け、二度といたずらはしなくなるわ、とサリーは取りなし、お父さんがバイクの後ろに乗るなと注意するのはもっともなことで、棺桶の蓋に乗る方がまだましなくらいよ、本当のことを話せばお父さんは許してくれるわ、さあ、ちゃんと打ち明けて(split fair)、あなたの方が悪かったんでしょう、とサリーはやさしく説得する。ビディは観念して、そうだ、と答え、ルークは10時に送り届けようとしたけれど、素敵な夜だったから海岸ドライブを持ちかけて、途中でバイクが２、３回故障し――ビディの答えは２回で、ルークは１回サバを読んで誇張していた――ルークがひどい悪態をついた（cursed like a dragoon）ことも含めて、サリーの質問をほぼすべて肯定する。最後に、ルークとは何十回も（scores of times）デートした経験が自分にはあるけれど、ルークはあなたにキスしようとした？とサリーは尋ねる。ビディは即座に否定し、やっぱりそうなのね、彼は間抜け（a mutt）だから、私もずっとがっかりさせられたわ、とルークの奥手な草食男子ぶりを強調する。ヘンリーがキスの件をビディに念押しすると、ルークはレーシング・カー（speed motors）の話ばかりする馬鹿な男で、付き合っていたのはからかってやるため、とビディは答える。ビディは世の中をわきまえていて（Biddy knows her way about.）、付き合う相手をちゃんと選んでいた、とサリーは持ち上げ、絶対にデートしない男子も大勢いる、と不良少年との交際は避けていたことをビディも主張する。ヘンリーはようやく納得するものの、皆の前でもう一度娘との交際禁止を言い渡すために、ルークを呼ぶように命じる。

サリーに促されてエレンはルークを呼ぶ。ルークが部屋から出てくる。ビディは彼を横目で見て、にやりと笑う。ヘンリーはルークの襟をつかみ、二度と近寄るなと言ったのに、お前はバイクにわしの娘を乗せたんじゃないのか、と凄む。どうしてもバイクから降ろせなかった、とルークは抗弁する。ヘンリーは、こん畜生め（By the ’tarnal［＝eternal］Moses!）、今度我が家の３マイル以内で見かけたら、まず殺してから水車堰（mill-dam）で溺れさせるぞ、と断言し、お前みたいに皮の被り物をしたハイエナどもが、わしらが税金を払っとる道をこの途方もない代物（＝バイク）でぶっ飛ばすから、おちおち牝牛たちを原っぱに連れていくこともできん、と怒鳴りつける。これにはエレンも同意の言葉を投げる。ヘンリーはなおも襟をつかんだ

ままルークを揺すぶって、お前がわしの息子なら、泥炭の山に半年縛りつけてパン屑だけを与え、それでも根性が直らんようなら、袋詰めして溺死させてやるぞ、と凄む。この子には父親がいなかったんです、とエレンが助け舟を出すが、近頃はどいつもこいつも父親がいないようだが、鉄拳制裁を食らわす男親はいるんだぞ、とルークを突き放す。そっちこそ失せやがれ、狂人め、カラスの群れのように通行人にたかってくる娘どもを表に出すんじゃないぞ、とルークは、捨て台詞を吐いて部屋に逃げ込む。この棒をお前の血で塗ってやる、と逆上するヘンリーに向かって、娘さんが無事だったのが何よりで、帰りのバスが２分後に通るわよ、とサリーは声をかける。ヘンリーはそれを聞くと、ビディの腕をつかんで退散する。あなたのお陰で助かったわ、とエレンはサリーに感謝する。

ピーターが登場し、狂人ヘンリーが誰の頭皮も剥がさずに手ぶらで帰るのは初めてだ、と驚き、ルークが奇跡的にヘンリーを追い出したのよ、とエレンは取り繕う。例の（再婚）話をネッドに切り出したか、とのピーターの問いには、まだ話していない、とエレンは答える。

ネッドが登場。ルークは自分のごたごたが解決したから、この農場に留まってほしい、とネッドに頼むが、あの狂人（ヘンリー）に家を壊させないようにと戻ってきただけで、自分はどこでも働き口がある、と断る。ネッドがいなくなっても、彼が僕の子守りをした昔話を母さんからぐだぐだと聞かされる（chewing the rag）から、僕はこの家には残らない、とルークは言い放つ。するとエレンは、受け取ってきた亡夫の遺言状をルークに渡し、数日後にはルークが全財産を相続することになっているから、自分がぐだぐだ言えば追い出せばいいわ、と告げる。身内の話が始まるようならお暇します、とサリーは申し出る。ヘンリー父娘との窮地から救ってくれたサリーにお礼をしなさい、とエレンはルークに命じるが、父親ラビットはたしかに金銭目当てだったけれど、私が望んでいたのはルークだけ、でも今となっては、礼金はもちろん、ルークも要らない、と言ってサリーは立ち去ろうとする。行き先を尋ねるルークに、いったん自宅に戻ってダヴェントリ[(10)]（Daventry）からのラジオ番組を聞いて、明日にはスコットランドの姉の元へ行き、お金が工面できたら（raise the wind）看護師になる勉強をして、来年の夏には看護師の青い制服姿に羽根付きの婦人帽（poke bonnet）をかぶって故郷に錦を飾るわ、と将来の夢をサリーは語る。するとルークは、僕も一緒にスコットランドに行く、と言い出す。サリーはそれを「馬鹿げた考え」（the big idea）と一蹴し、看護師は晩婚が常で、40歳か50歳になって、金持ちで年寄りの患者を選んで結婚し、３か月後に殺してしまうのよ、とブラック・ジョークで

(10)　イングランド中部ノーサンプトンシャー州の町で、BBC国際放送のラジオ局がある。

切り返す。ルークは、一緒に行く、と駄々っ子のように繰り返し、こんなものはどうでもいい、と持っていた遺言状をびりびりと破る。エレンは止めさせようと叫ぶが、ピーターは、破らせて食べさせればいい、と遺言状が反故になるのを喜ぶ。破った遺言状の紙吹雪を降らせて、これでもう僕がネッドをクビにしたとか、母さんを家から追い出したとか言わせない、とルークは叫ぶ。頭がいかれている、と呆れるピーターに、いかれているにせよ、自分が何をしているかは分かっている、年寄り連中に四六時中、監視され説教されるのではなく、手引き紐（leading-strings）や束縛（tether）を壊して、これからは好きな道を歩み、好きなことをする自由人になる、とルークは訴えるが、具体的な行き先をサリーに訊かれると、僕の子守りをした人がいない場所ならどこでもいいや、と曖昧な答えしか返せない。サリーは、たとえルークが跪いて頼んでもルークと一緒にはならないと告げ、その理由として、（第２幕でラビットがエレンと裏取引した場面で語られたように）サリーの亡き母に尽くした苦労話をエレンが持ち出して、故人の墓を暴くような言動をしたこと、さらにはサリーの兄が犯した何かの窃盗事件でもエレンが支援してくれたという、初耳の家族の醜聞を聞かされ、屈辱を感じたことを挙げる。ラビットに恥をかかせたかったからで、サリーを傷つけるつもりはなかった、とエレンは詫び、兄の件はサリーとは無関係だし、窃盗なら自分も母親の羊や金を盗み、タバコやガソリン代のために卵を盗んだこともある、土曜の夜に６ペンスの小遣い、クリスマスでさえ１シリングしかくれない母親の吝嗇の方が窃盗よりもよっぽど卑劣じゃないか、とルークも、奇妙な論法でサリーの兄や自分の窃盗さえも擁護する。とにかくルークの気を鎮めるためにも、自宅までルークに送らせて頂戴ね、あなたは息子にはもったいない存在よ、とエレンはサリーに懇願する。最初からそう言ってくれればよかったのに、とルークも応じ、人目につく道（open road）を一緒に歩きたくないわ、となおも抵抗するサリーに、それなら牧場を抜けて、干し草を仕上げよう（finish the hay）、とルークは誘い、二人は退場。

ルークが遺言状を破り捨てたことを指して、これであいつはあんたの思いのままだ（you have him at your mercy）と、ピーターは繰り返すが、我が子を思いのままにしても始まらないわ、いまなら遺言状をつなぎ合わせられるかも、とエレンが答えると、ピーターはすぐさま、断片をいくつか拾い集めて――燃やしてしまう。これでもう原状回復は不可能で、ルークには数ポンドの金をやって追い出せばいい、とピーターは提案する。ルークには亡き父親の農場に留まってほしい、とネッドは反対し、私のような年増女が農場にいても役立たず（a piece of lumber）で、子どもたちが育たない農場は海底に沈んだ方がましよ、とエレンも賛同する。サリーを嫁に迎え入れて息子夫婦の皿洗いでもする気か？とピーターが脅しても、サリーが息子に似合い

なら、私にも似合うはず、とエレンは受け流す。人が計画を立てればすぐに癇癪を起こすから、女のために解決策を練っても無駄骨だ、とピーターは呆れ果て、ルークをスコットランドに１年やれば、一人前の男になる、と主張する。街の不良（a corner boy）に落ちぶれ、身持ちの悪い妻と子どもを連れて里帰りするのが落ちだわ、と反論するエレンに、雑働きの女中としてここに残りたいのなら、あんたの通夜にも参列せんぞ、とピーターも負けていない。あなたの血筋も流れているのだから、ルークにきつく当たらないでほしい、とエレンは懇願するが、それならルークを呼び戻し、あんたもネッドもルークに詫びるがいい、そうしたらわしもルークに詫びを入れておとなしく帰ろう、とピーターは（おそらく、受け入れるはずはない、と高をくくって）提案する。エレンは早速、ルークを呼びに行く。

老人が奴隷なのだから、若者が専制君主なのも無理はない、わしには４男３女の子どもがいるが、成人したら門扉に連れて行き、めいめいに６ペンス（kick）を１枚与え、＜これがお前の財産だ、投資して利子で食っていけ＞と言い渡し、家族にこき使われるような真似はせん、とピーターは持論を展開する。案じていた通り、あなたはルークと衝突し、自分は仕事を失った、いますぐあなたは帰るべきだ、とネッドがピーターを非難すると、この国は時速100マイル（約160キロ）で破滅に向かっている、ガソリンに映画、密造酒、ジャズ、失業手当、バス、生脚、あらゆる種類の舶来の罪悪が蔓延している、わしやあんたはあくせく働いて（toil and moil）生計を立てるだけで満足していたが、新しい人種は高給や美食、怠惰を望んでいる、とピーターは現代の悪しき風潮を嘆く。しかし、ネッドは違う視点に立つ。通学する児童の送迎に大型バスが運行するのは良い方向への変化であるとネッドは考える。同じ大馬鹿野郎なのにネッドとルークの折り合いが悪いのは不思議だ、とピーターは皮肉るが、仲が悪いのは自分のせいではなく、自分はつねにルークの立場に立って物事を眺めてきたから分かるのだが、バイクは荷車（low-backed car）の進化形であり、バイクに乗る若者は「可愛いペギー[(11)]」（“sweet Peggy”）の傍に座っていた人物ではなく、すっかり「新しい青年」（a new gossoon）であり、これまでにない扱いを必要とする、とネッドは若い世代を擁護する。

ラビットとマグが互いに罵り合いながら登場。お前の陰口のせいでこの静かな家がごたごたに巻き込まれた、とラビットがマグを責めると、だったら10ポンドを返しなさい、ネッドが言った通り、まともな毛長イタチならあんたと同じ野原にいるもんで

(11)　サミュエル・ラヴァー（Samuel Lover, 1797-1868）の詩「荷車」（“The Low-Backed Car”, 1846）の中で歌われている女性。「荷車」の写真と詩のテキストは以下のサイトを参照。http://ingeb.org/songs/whenfiri.html

すか、とマグは迫るが、金など一銭も貰っとらん、とラビットは白々しい嘘をつく。マグはいったん退場。ラビットはマグとは縁を切ったと打ち明け、マグがもう一月(ひとつき)いたら教区じゅうの人間の人格が汚されるところだった（ただし、非の打ちどころがないネッドの人格と、いまさら直しようがない自分の人格は例外だ、と社交辞令を忘れない）と、マグがあらぬ噂を立てていたことを示唆する。そしてここへ来た本当の目的は、サリーとルークが牧場を歩いている間に互いに涙を交わし、よりを戻したことを伝えることと、サリーがこの家に嫁入りするなら、エレンは若夫婦に家を譲って自分は出ていくだろうが、貯えがあるから別の農場を買うだろう、とラビットは将来を予測する。これを聞いたピーターは、例によって「地獄からオマーまでの間で」とびっきり有能な男だ、とラビットを褒め、新しい農場でエレンとネッドが暮らすのが自分の当初からの計画だった、と感心する。

エレン、そしてルークとサリーが登場。＜よりを戻した＞というラビットの情報とは裏腹に、二人の話し合いが物別れに終わったことをエレンが告げると、サリーが拒絶しているのならわしが説き伏せる、マグとは別れたから、わしの再婚話を気にする必要はない、と知らせ、娘が農夫の妻になるというのに、わしが雑役婦と結婚するほど、家名に誇りがないとでも思っているのか、と見栄を切る。しかし、ルークが遺言状を破り捨てたために農夫でなくなることをサリーから聞くと、ネッドかピーターの仕業だろう、と決めつける。ルークがそれを否定し、自分の一存で遺言状を破き、自分は農夫になりたくない、と打ち明ける。目算が狂ったラビットは、それならどうして結婚を望むのか、結婚してバイクに乗って暮らすつもりなのか、とルークを責め、農場を所有しないルークなど誰の結婚相手にもふさわしくない、もっとましな亭主をウサギの罠で捕まえることもできるぞ、とサリーに翻意を促す。二人がこの家に引っ越してエレンを追い出す真似は絶対にしない、とサリーは請け合い、50ポンド貰えるなら文書に署名して僕が出て行く、とルークも提案する。しかしエレンは、お前に渡すのは亡き父親の農場だけで、自分の世話は自分でするから心配はいらない、と提案を受け入れない。ラビットはここぞとばかりに自らの提案を持ち出す。それはマケイン大尉の売却地３件（各40、50、80エーカー）のうち50エーカーの土地をエレンが購入し、穏やかで真面目で純朴で神を畏れる好青年ネッドとともにその土地を管理するというもので、地所管理人（the land steward）用に建てられた立派な赤煉瓦の家も付属している、とラビットは説明する。ピーターはこの提案に大賛成だと喜び、ちょっと内緒の話がある、とネッドを戸外に連れ出す。

旅行鞄を抱え、正装したマグが登場。旅立つから10ポンドを返しなさい、と要求するマグに、お前さんが言い触らした、エレンとネッドにまつわる根も葉もない陰口

をエレン本人に話してみろ、とラビットは話題をそらす。マグは、その陰口はラビットから聞いた話で、７年前にエレンとネッドが極秘結婚し、できた３人の子どもを孤児院に預けている、というものだった。エレンは驚愕し、すかさずラビットは、同じ釜の飯を食って（and she aitin’［＝eating］your bread）おきながら、よくもそんなひどい話を広めたもんだ、と自らも驚いて見せる。ここで働いて１年（a twelmonth［*sic*］）なのに７年前の話をどうして私が広められるのよ、とマグは反論する。マグに金を返して出て行かせなさい、と娘サリーに諭されたラビットは了解し、微風にはためくリボン付きのフォード車で新婚旅行できると思っていただろうが、結婚は一度でたくさんだ、わしの夢は誰ひとり女の姿など見えない山頂に小屋を建てることだ、と断言する。その小屋で死ぬか、焼かれて灰になればいいわ、毛長イタチ野郎[12]（polecat）、とマグが罵ると、どっちでもお前と暮らすよりはましだ、とやり返して、ラビットはマグを戸外へ連れ出す。

自分とネッドの忌まわしい噂話を耳にしたことがあるか、エレンに尋ねられたルークは、まったくの初耳だと、否定する。その話はラビットがでっち上げたもので、金を返して貰うのも忘れて逃げ出すくらい、マグが怖がるだろうと、ラビットが企んだのだと、サリーは解説する。ルークは、自分たちの結婚話に決着をつけたいから、マケイン大尉の土地をどれか僕に買い与えて、母さんはネッドとこの家に残るのが簡単な方法だと提案し、サリーもそれを後押しする。亡き父の農場を息子から巻き上げた、と人が噂することを懸念するエレンに、逆に息子が母親を追い出したと噂される方がもっとひどい、とルークが説得するので、ついにエレンはこの提案を承諾し、煉瓦造りの家が付随する土地をルークに買い与えることを決意する。アイルランドで一番素敵な家にします、とサリーは応じ、もし子どもができても、期待をかけすぎないようにね、そうすれば失望しないですむから、と言ってエレンは退場。

一人で思いっきり泣きに行ったのよ、とのサリーの言葉に、なんで泣くことがある？と無神経な反応を示すルークに、お母さんの扱い方をこれからは私が教えてあげる、とサリーは諭す。分かったからキスしてくれ、とせがむルークに、キスするために結婚するのではない、働きなさい、とつれない態度のサリー。（母親の）束縛を断ち切ったら、別の束縛が始まった、とぼやくルークに、そうよ、管理人が変更になっただけ、とサリー。それでもサリーがいてくれるのが何よりも働き甲斐になる、とのろけるルークに、キスは新居に入るまでお預けよ、さあ馬に鞍をつけて新居の下見に行きましょう、とサリーは誘う。ピーターの車に乗せてもらえる、とルークが言うと、野暮なことは言わないでよ、二人だけで行きましょう、バイクに足りない部品

(12)　この言葉はネッドがマグ自身をなぞらえた悪口だったが、なぜだかラビットに転用されている。

が分かっているから、私が修理するわ、持ち主さえしっかりしていれば、バイクはしっかりして、とても便利だわ、とサリーはバイクを称賛する。このバイクは飛行機（flying-machine）のような強力エンジンの爆音を轟かすんだ、とルークは愛車を自慢して、バイク用の服に着替えに行く。その隙にサリーはプラグを挿し込む。

エレンが戻る。新しい農場の下見にルークとバイクで出かけると声をかけるサリーに、あなたと一緒なら息子がどこへ出かけても心配ないわ、とエレンが答えるので、サリーはエレンに感謝のキスをする。ルークは私がきちんと守りますから大丈夫です、牛とかのことで助言が必要な時は彼がネッドを訪ね、私もあなたを訪ねます、とエレンは恭順な応対を見せる。きっといい奥さんになるわね、最初はとても突飛な（flighty）子だと思ったけれど、とエレンが打ち明けると、誰しも、若者は頭がおかしいと思うもの、でもよい夫やよい家庭がどういうものか分かりかけてきました、さあ今度はあなたが幸せになる番で、ネッドと結婚してください、とサリーは水を向ける。私たちは時代遅れの（old-fashioned）人間だから、そういう話は出さないで、とエレンは戸惑うが、フリルが変わるだけで時代の流行（fashion）は変わらない、すぐにでも（in two ticks）縁談をまとめましょう、とサリーは提案する。

ネッドとピーターが登場。自分とルークは新しい農場へ移り、ハマシオン[13]（Michaelmas daisies）のようなお二人はこの家に残るということで万事解決したとサリーは報告し、結局はいつも女たちが物事を決めるものね、と誇らしげである。恋でもしていない限り、普通の賃金の半額で、20年も朝から晩まで働く人はいないから、きっとエレンに惚れているに違いない、とサリーはネッドに求婚を促す。仕事に惚れているのかもしれない、とネッドが煮え切らない態度を示すので、仕事に惚れるなんて病弱な芸術家ならいざ知らず、健康な人が辛い労働を好むわけがない、それにお二人は精神的かつ農業的な絆で結ばれているから、事実上、夫婦も同然よ、とサリーは巧みに煽る。サリーの短いおかっぱ頭（cropped head）には古来の英知がある、とピーターは、自分がサリーの伯父になることを誇らしく思う、と褒めたたえ、長らく孤児（orphan[14]）だったルークにネッドという継父ができたことをサリーは知らせに行く。

ピーターはエレンに、亡夫とのひどい約束（再婚禁止）の件はネッドに伝えておいた、と打ち明ける。エレンは、そのことはルークやサリー、ピーターの妻にも口外しないように釘を刺す。ピーターは二人の婚約を祝い、結婚式に参加してダンスを踊る、と言い残して立ち去る。残されたネッドとエレンは互いに夢のような気分だともらし、気丈な性格に見えても実は根っからの臆病者で、この日が来るのを15年前から

(13)　直訳は「ミケルマスの雛菊」。９月29日のミカエル祭の頃に咲く花で、アスター（aster）とも呼ばれる。人生の秋に結婚する二人を遅咲きの花に譬えた表現。
(14)　英語の定義は、片親しかいない子どもも含む。

望んでいた、とエレンは告白する。僕の方は20年前からで、まっすぐな道を歩んできた甲斐あって、ようやく夢が叶った、とネッドはエレンにキスをし、一瞬のうちに若返った気分だ、と昂揚する。エレンもまた、恥ずかしいほど同じ気分だと、答える。

ネッドの婚約を聞きつけたラビットが登場。山の所有者となったネッドに、立ち入り禁止の標札をどうするのか、尋ねる。標札は取り壊し、望み通りに山頂に小屋を建ててよい、とネッドは答える。ラビットは二人の幸運を祈り、自分にとって山は恋人であり、山で暮らし山に骨を埋めるつもりだ、と言って、退場。

ルークとサリーが登場。ピーターが万事を取り計らってくれた、とエレンはヘルメットをかぶったサリーに伝える。バイクを押して出発を急かすルークのことを、まだ新しい継父のことをはにかんでいるだけで、じきに「ネッド父さん」（Father Ned）と呼びかけるのに慣れるわ、と請け合う。はにかんでなんかいない、お二人には葬式[15] だけど、幸運を祈る、とルークが悪趣味な言葉をかけて先に出るので、サリーは注意し、ネッドたちには「干し草を仕上げに行く」ように勧めて、退場。牧場に出かけて干し草を仕上げるのはいい考えかもね、と呟くエレンに、もっと良い計画がある、と言ってネッドはドアを閉め、エレンの傍に座って、ここで干し草を仕上げよう、とエレンを両腕で抱きしめる。幕。

第２章　講評

母子家庭のケアリー家（寡婦エレンと一人息子ルーク）、現在は事実上の父子家庭のハミル家（男寡のラビットと次女サリー、長女はスコットランド在住、長男の所在は不詳）――この両家は、平野部に暮らす自作農と山間部に住む猟師という居住文化や階級の対立が顕在化する構図を持つと同時に、それぞれの家庭内における親世代と若い世代の価値観の衝突、さらにはケリー家における雇用主と雇用人（作男ネッドと下女マグ）の労使間対立もはらんでいる。これに加えて、脇筋ではあるが、別の一家のヘンリー家（世帯主ジョンとその娘たちの一人ビディ）やエレンの義理の伯父ピーターといった個性的な面々が絡み合う。さらにまた、この芝居は「喜劇にも関わらず、アイルランド農村情景の変貌する側面を映し出しており、興味深い社会的文献[16]」でもある。

サリーにストーカーまがいに熱烈に求愛しておきながら、中古バイクを手に入れるとバイクの方にうつつを抜かすようになるルークと、その移り気でひ弱な性根を叩き

(15)　「結婚は人生の墓場」という謂いか。Marriage is the tomb of life.と英訳できるが、類似の慣用表現は英語辞書には見当たらない。
(16)　*Selected Plays of George Shiels*, p.xviii.

直そうと苦心する勝気なサリーの恋愛、古風な貞操観念を持つ未亡人エレンと彼女を慕う実直な作男ネッドの慎みあるひそやかなロマンス、密猟者ラビットと下女マグの打算的な縁組、これら三種三様の男女関係が同時進行する。

一方的に心変わりした軽佻浮薄なルークを批判するのはたやすいが、彼の日々の農作業に対して正当な報酬を与えずにきたエレンは、経済的自立の基礎を築く機会を彼から奪った点では、ルーク同様に批判の対象となるだろう。

執筆時期の時代的制約から、民族差別的発想（「支那人」は奴隷労働にふさわしい）や宗教的偏見（当時、一夫多妻のモルモン教への揶揄）、精神病患者の嘲弄（「狂人ヘンリー」への理不尽な恐怖）が散見され、現代の倫理的基準では原作通りの上演は憚られるかもしれない。しかし、たとえば「狂人ヘンリー」の言動は、一部の激越な暴言を除けば、未成年の娘の躾に厳格な父親のとるべきまっとうな対応に思えるし、悪意に満ちた描かれ方とまでは言えない。

いつの時代も、「きょうびの若者」は、親世代からは理解不能な新人類扱いを受ける。親世代は自分たちが若かった時の現実に対して甚だしい健忘症に陥る。しかし、ネッドのように若者の視点に立って物事を見つめれば、表層的な変化の裏に、万古不易の摂理を見出すことができる。その意味で、この『新青年』は1930年の北アイルランドを越えて、あらゆる時代や場所の読者・観客の共感を呼ぶ普遍性を備えている。

おわりに

冒頭に記したように『ジョージ・シールズ戯曲選集』収載の全６編を紹介する作業は拙論で完結し、ネッドやサリーの言葉を借りれば、「干し草を仕上げた」ことになる。しかし、この選集に収められなかったものの、まだまだ入手可能な他のシールズ作品はいくつも残っている。筆者の余力がある限り、また学部再編後も本誌への投稿資格が認められるならば、落ち穂拾いに鋭意努めたい。